北支

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 [illegible]十八年五月十五日印刷納本
昭和十八年六月一日發行（每月一回一日發行）第四十九號

現地編輯

6·5

治水と利水 一

○洪水のもつとも頻繁に起る地域

ロシ エンク・バックの地圖による

支那四千年の歴史は、人と水との闘爭史であつたともいはれる。

歐洲の文化は森林を開拓することによつて築かれたいはゆる森林文化であるが、東洋の文化は治水文化といはれてゐる。支那においては政治も、經濟も、宗教も、その他すべての生活現象が、治水・灌漑と關係を有してゐるのであつて、灌漑・治水を離れて民衆の生活は考へられなかつた。

支那ほど灌漑が大規模に利用されて農業經營上、重要な役割を果し、また縱橫に走る水運路としての運用を見た國は他にないのである。

民衆のほとんど全部が農業を生活の根據とし、しかも河川が縱橫に走つてゐるのであるから、利水の問題は如何に重要であるかは自明の理である。

支那の水害饑饉は實に徹底的であり悲慘を極めたものである。その度數は十年間に九回といふ驚くべき記錄を有し、五年、六年に一度といふ風に周期的に見舞ふのであつて、それが農作物の繁茂期或は收穫期に定まつて襲ふ。その上退水が遲れて早春期になつても洪水が退かず、播種期を逸して翌年の收穫は全く絕望となり、二年にわたる災禍はつひに善良な農民を土匪化せしめるのである。

「治國卽治水」とは支那において始めて至言となるのである。治水に心を致し民生を收めた爲政者のみが長く天下を取つた事實は、このことを物語るものである。

大東亞戰爭下、各種決戰資源の對日供給地として共榮圈内に重要な地位を占めつゝある華北蒙疆の現狀においてその開發と建設の根本問題ともいふべき治水と利水に、現地の日華當局は擧げて大きな努力を拂ひつゝあり、目下最緊要の問題とされてゐる食糧の增產と民生の向上が、治水と利水によつても解決されんとしてゐることは注目されよう。華北政務委員會建設總署では昭和十五年度を初年度とする五ケ年計畫の治水事業を鋭意繼續中で、今年度は次の通りの事業を進めつゝある。

一、石津運河の建設
　沿岸地區の灌漑實施とともに、一部導水路の整備及び運河の掘鑿に當る。

二、薊運河、灤河
　水路の開發に並行して取水工事、灌漑に當る。

三、黄河の北流
　天津地區の灌漑用水とする。

以上のほか華北合作事業總會による三十萬眼の鑿井計畫などがある。

南船北馬とはいふが南船も北船も共に盛んである、長い間北京が都であつた關係上利水には特別な注意が拂はれたのである、北支の水運路は文字通り四通八達、現在四千二百粁に亘つて華北交通が近代的な運營を行つてゐる

治水と利水 二

しと〳〵降る春雨もなく、蒙古風が何時となく止むと、北支はもう眞夏である。乾いた熱風が畑に街に漂ふ。空には一點の雲霓も見られない。畑地は白く鹽を吹き出す。井水を畑に流すため、人、騾、驢がいたる所で轆轤を廻す。井水はちよろ〳〵と流れるが、燒けた地面には吸はれるよりも蒸發してゐるやうに見える。井水が涸れる、畑地は壁のやうに堅く、大きい罅が擴つて行く。河川は干上つて民船は河床に吸付いてしまふ。それでも龍王神は雨を降らさない。かゝる旱魃に備へて、農民は幾多の井戸を鑿るが、到底、間に合はない。農民は貴重な種子を無にした先祖の地を捨て、食を求めて彷徨しなければならない。

洪水の暴虐さ、大陸交通の建設は苛酷な自然との闘ひの連續だ

或は又、大行山脈に不氣味な雨雲を見るや、どしや降りとなつて二三日續き、それが數度くりかへされると、もはや、濁流は山麓を流下し、北支平野に奔流する。堤防を溢れた水は北支平野に海のやうに擴がり、今までの地平線は水面線と化し、部落は濁流の中に點々として島のやうに浮ぶ。農民は豫め洪水に備へて、小高い丘に家屋を造るのである。だから滹沱河流域の母親達はその娘を高い丘の上の家へ嫁がせることを希つてゐる。近くに河もない農村に小舟があり旅人の目を驚かすのもこんな時の用意である。黃河北流時特に水害の酷かつた濟南の西南の東平縣城は城門に安山岩の丈夫な竪溝を造りそれに角材を鎧戸のやうに落して、洪水の侵入を防いでゐた。城壁は單に敵匪を防ぐのみではなく、堤防でもある。一度、氾濫水に部落が取圍まれると、住民は食を節してその退水をじつと待つ。穀物が無くなれば種子を嚙む。今でこそ上品な點心となつてゐる瓜子(クワツ)兒は洪水から生れたものに相違ない。それも喰つて無くなれば家畜を斃し、楡の樹皮まで喰ふ。

次頁につゞく

この水が翌年まで退かない、冬になると凍るのである

前頁より

この恐しい旱魃と洪水。一體その原因はどこにあるのであらうか。それには幾多の原因が數へられるが、直接の原因は、何と云つても降水量の不均等にある。北支の雨は毎年同じやうには降らない。黄河誌に依れば、六十二年間の北京の年平均降水量は六三五粍、その間、最大年降水量は一〇八四粍で最小年降水量は僅かに、一六八粍である。即ちその最大は最小の約六倍半に相當する、かゝる降雨の不均等はとりもなほさず、旱魃と洪水とを齎らす。

河水調節水路

治水と利水 三

運河の建設

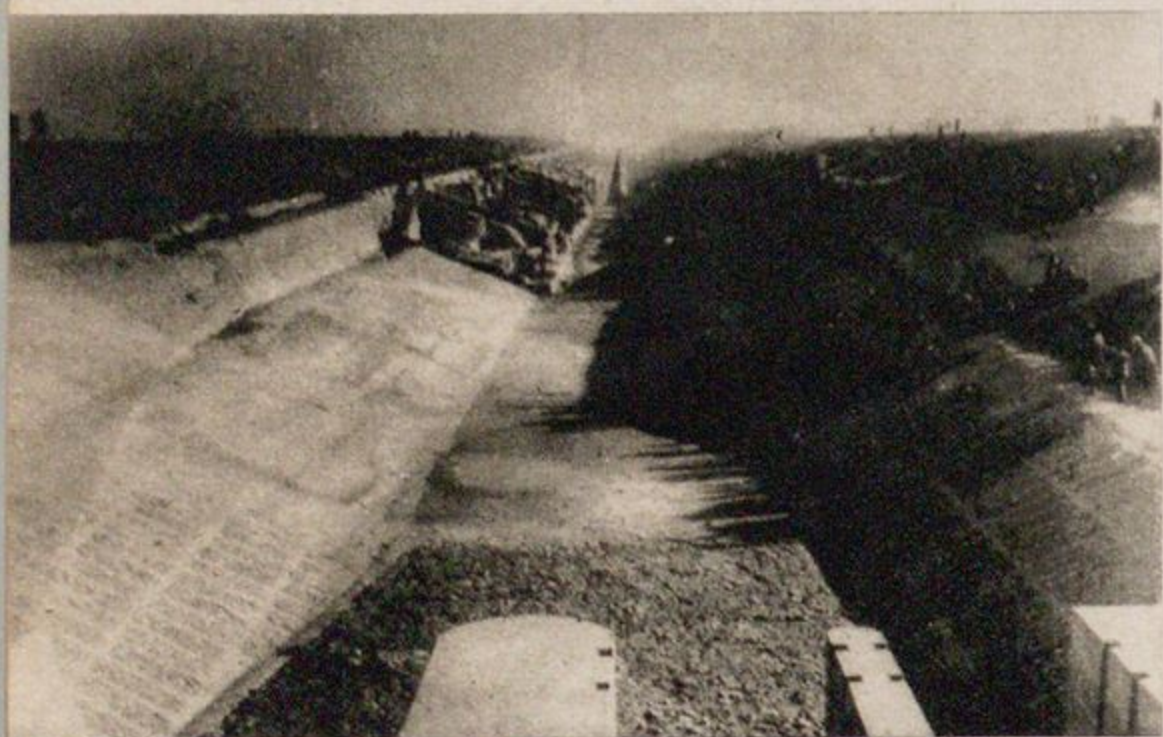
灌漑用水路

發電用水路

堰堤工事

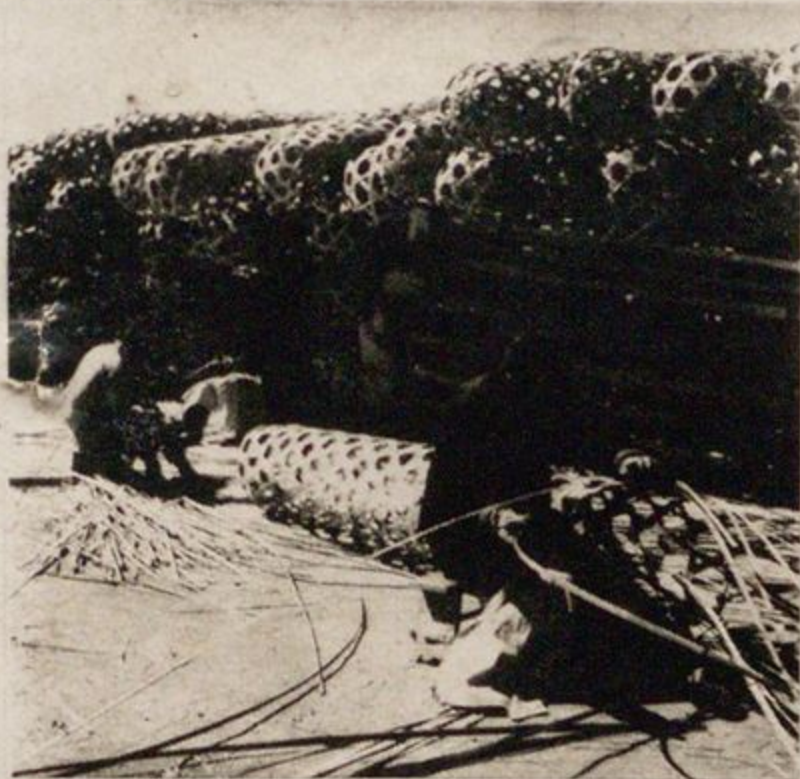
又、年降水量の大部分が夏季の短期間に降つてしまふことを考へ合はすと尙更である。（「北支」第四卷第九號參照）山には森林らしいものはなく、降り注いた豪雨はどつと谷間に落ちて、急湍となつて合流して北支平野へ流出する。傾斜が緩むから、前の水と後の水とは衝突して堤防を溢れてしまふ。北支の河川は灤河、黃河を除く總ての河川は天津に聚まり白河となつて渤海に注いてゐる。それ等幾多の河川の洪水は天津へと迫つて來る。天津をこの水魔より防ぐために、その南方に洪水の放水路である減河が造られてゐる。平常一滴の水もない、立派な堂々たる堤防の河川を見て旅人は驚くであらう。衞河を流れ南運河を經て天津に迫る濁流はこの減河に足をとられ、力を失つて直接渤海に放流されるのである。

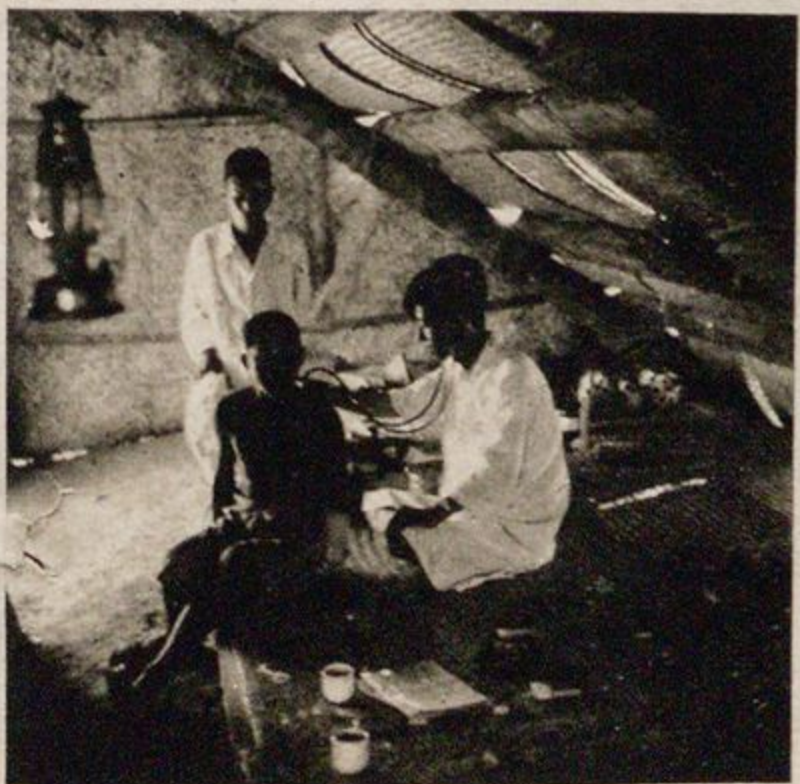
中國軍閥時代とは云へ、治水工事に意を用ひてゐたが、技術の拙劣と不良衞門のため、成功したことは稀であつた。河幅を必要以上に擴げて堤防を築き、その內側の地面は農民に貸しつけて年貢をとり立てた。堤防は水を防ぐのではなく、私腹を肥すためのものが多かつた。こんなもので洪水を防ぎ得るわけはなかつたのである。かゝる社會的な悪弊も手傳つて北支は長い間、天災に苦んで來たのである。然し、支那事變後、事情は一變して來た。特に昭和十四年大水災後の治水と利水工事には拍車がかけられて來た。そして現在、着々と進捗してゐる治水利水建設工事は幾多見られるが特に滹沱河のものは素晴しい。

次頁につゞく

工事場全景

運河建設に協力する愛護村民

前頁より

滹沱河は大行山脈にその源を發し、石門の北を經て東流し、滏陽河と合流して、子牙河となり、天津に於て白河に注いでゐる。元來、荒れ河で水運の便も尠く、その洪水時の災害は目に餘るものがある。まづ石門の西三〇粁の地點、支流沾河を堰止めて貯水池を設け、流れを調節し洪水を防ぐと共に、堰堤の落差を利用し、三千——四千キロワットの水力發電所を新設する。又石門北方黄壁莊に於て、本流を堰止めて、水を石門に導き、一つは石德線南側の耕地二萬六千町歩の灌漑水に供給し、一つは東方滄石國道に沿うて運河を開鑿し、滏陽河と結び、石津運河として、石門——天津間の水路を建設する。この灌漑地域では、約一町歩に一眼の灌漑井戸が必要とされてゐるが、現在は、約二〇町歩に一眼しかない。然も砂地が多いので、それ以上の鑿井は困難とされてゐる。これがこの地方の不作と旱魃の原因となつてゐる。滹沱河の灌漑水路が完成すれば、一町歩に二眼乃至三眼の井水を持つと同様の効果がある。現在一畝小麥の收穫高は八〇斤であるが、水が潤澤であれば一八〇斤の收穫で、約二倍餘の增産となる。この地方の豫定灌漑面積は二萬六千町歩であるから、約二六萬斤の增産と計算されるから素晴しい。

賃銀によつて潤ひ、自分たちのための灌漑と治水の完成に働く、河渠の建設は文字通り恵民土木事業の中心をなすものである

蛇籠つくりにも力がこもる

工事場には病院も設けられてある

晝休みの語らひも希望に明るい

老人もこどもも馳せ參じる

尙、石門より天津へ連がる三二〇粁の石津運河に五〇噸の民船を浮べ、將來約二〇〇萬噸の貨物を輸送すると謂ふのであるから驚嘆せざるを得ない。そして着々工事は進められ、今年中には灌漑水は畑を濡し、二年後には民船が石門・天津間を往來するのである。

又大仕掛な工事は黃河に見られる。昭和十三年六月、蔣介石の手で破壞された堤防から奔流した黃河の水は亂流一萬八千平方粁を蔽ひ、被害人口は三〇〇萬に上ると推定されてゐるが、その新黃河は夏季、ともすれば開封以南の治安地區に氾濫せんとしてゐる。

そこで開封の南方約二〇粁の河岸にある朱仙鎭より太康に至る一三七粁の堤防を堅固に築き、萬一に備へてゐる。單に、洪水を防ぐのみでなく、黃河の水を舊平漢鐵路の黃河鐵橋下より新鄉に導き、それを衞河に流し、南運河を經て、天津地區の二〇〇萬町步の耕地の灌漑用水とする計畫を立て、今年二月、黃河・新鄉間の導水路開鑿工事に着手した。これに流される水量は東京六〇〇萬市民に供給される水量と殆ど等しいといふから、これ亦驚嘆すべき大工事である。更に、鴨綠江水電所と日本窒素とは黃河に十一ヶ所の大堰堤を築造して發電に灌漑に尨大な計畫を立ててボーリングを行つてゐる。やがて、北支の暴君黃河を馴へてそれを大々的に利用する日が來るであらう。それは決して夢ではないのである。

次頁につゞく

愛護村民が各地から勢揃ひ

治水と利水 五

水田

前頁より

又灤河の水をその三角洲の荒蕪地に導き水田を開發し、薊運河の剩餘水を以て蘆台西方の荒蕪地に一萬町歩の水田を開發する計畫が立てられてゐる。天津西方の白洋淀は約四〇〇平方粁の

中國農民は水田には入り得ないといはれたことも昔語りだ

食糧增産は着々實際化されてゆく

湖であるが、今年五月までにこの周圍に堤を築いて貯水し、渇水期、湖の周邊の耕地に灌漑用水を供給すると共に保定――天津間を結ぶ保津運河の水量を保つことになつてゐる。

有名な蘆溝橋の架けてある永定河は昔、俗に「無定河」と呼ばれてゐたほど氾濫し、河道は移動した。淸朝康熙三十七年、蘆溝橋下の堤を修築し、帝は永定河の名を賜つたが、現在相變らず、氾濫し、その度毎に北京――天津間の鐵道は脅かされる。この根本的な治水對策を上流よりしつかりやらねばならぬと蒙疆政府は意氣込んでゐる。その他昭和十四年の水害後河道埋沒し上流に浸水地帶を作つた琉璃河の疏流工事のために、以前に勝る農耕地を獲得した。又、新鄕の西方淸化鎭の水利合作社の水田一千町歩は丹河の水を利用したものであるが、これは華北交通淸化鎭惠民硏究所の技術を以つてよく成し遂げ得たものである。かくして旱魃と洪水は克服されて、北支は明朗な樂土と化して行くのである

次頁につゞく

大陸に田植式が見られるやうになつた

河水を汲み上げる井戸、運河地帯に多い

驢馬、騾馬等一畜一日の灌漑量は四畝乃至五畝である

一人捲きろくろ井戸、一日一畝内外の灌漑能率をもつ

治水と利水 六

鑿井

前頁より

華北のやうに水を普遍的に且つ著しく必要とする地帶においては、地下水を供給する井戸は非常に重大な性質をもつ。日華協力による百萬眼鑿井の目標が著々實現されつゝあることは、華北農業の將來に大きな希望をもたらしてゐる。

昭和十八年度鑿井計畫

一、總數　三〇〇、〇〇〇眼

一、省別

省別	（大井）	（小井）
河北省	三七、〇〇〇	五〇、〇〇〇
山東省	三〇、二五〇	一〇一、〇〇〇
河南省	一二、二〇〇	六、〇〇〇
山西省	二〇、〇〇〇	——
豫備	五五〇	四三、〇〇〇
總計	一〇〇、〇〇〇	二〇〇、〇〇〇

飲料用の汲み上げ井戸

灌水溝

蝗

北支の晩春から初夏にかけてのお天氣續きの頃、風もなくて大地は氣味惡いまでに沈默する樣なことがある。かうした日和には大平原の空を渡る飛蝗の大群が、絶え間ない黑雲の如く大擧して行ふ大移動に出會ふことがある。甚だしい時は數時間から全日、時には連日に亘つて續けられる。その羽音は低いけれども無數のそれが物凄い騷音となり、旱魃に怯えてゐる農民の神經を極度に戰かしめる。一度この飛蝗の大群が耕地に降り着いたら最後、麥類を初め禾本科の作物はそれこそ見事に喰ひ盡され、蒼々とした豐饒の野は瞬時にして一面に灰褐色の荒野となる。年々不順な天候の下で、洪水と旱魃に痛めつけられる華北の農業に加へられるも一つの大きな災害が卽ちこの蝗害であつた。太古以來の記錄を調べた學者は河北、山東及び河南を主とする北支の大平原に於いて、三年に一回の割で蝗害が生じてゐる結果を得たと述べてゐるが、事實は殆ど連年北支の何れかの地方で發生してゐると思つて差支ないであらう。從つて北支の農民は雨

蝗追ひ、かうして一列横隊で柳の枝などを手に手に追ひまはすのであるが、それもほんの氣休めにすぎない追つても追つても絶えないのである

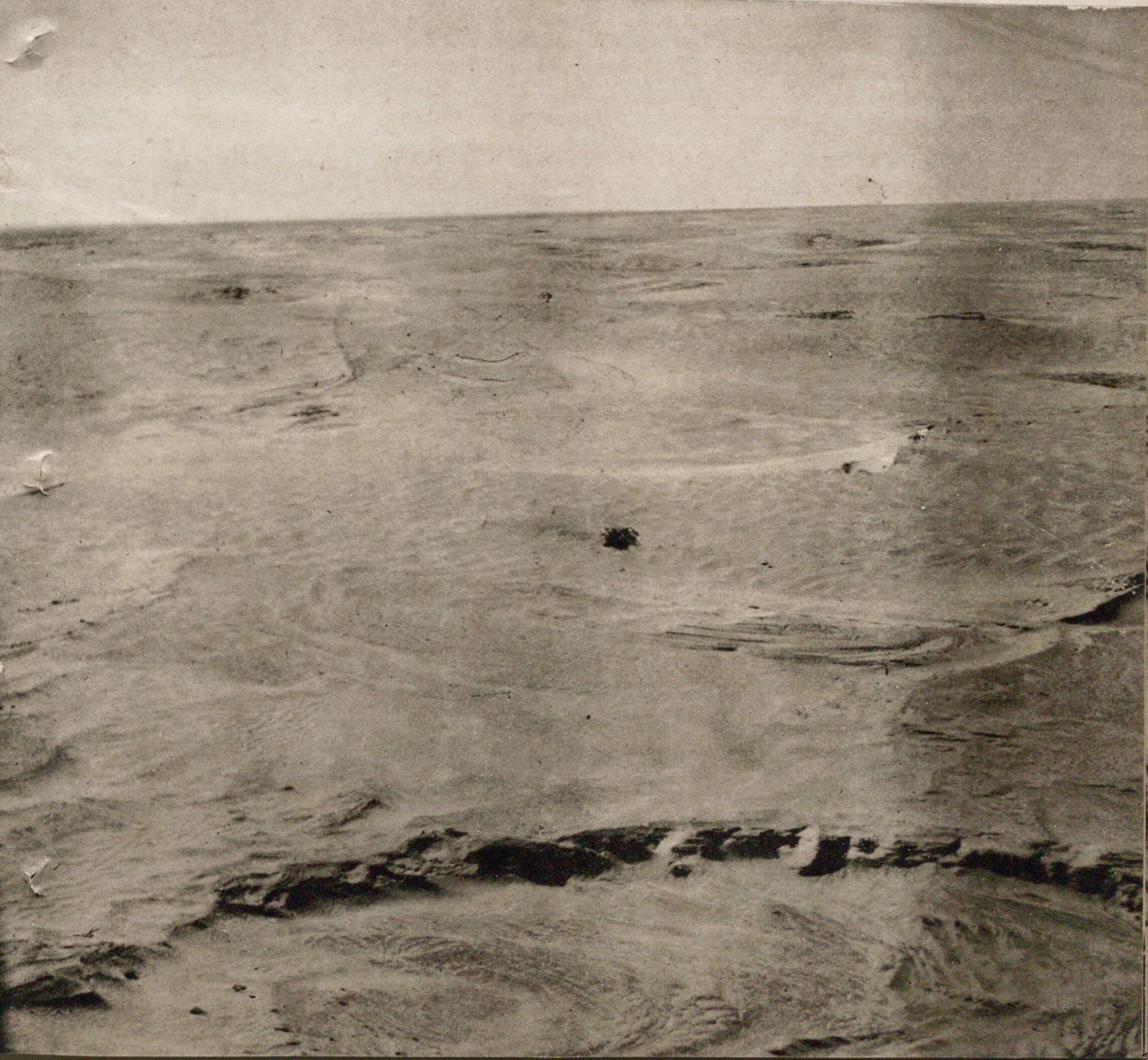
蝗の通つた後は見る影もなくあらゆる草木は食ひつくされてしまふ

蝗の來襲、實つてゐるようがゐまいが苅りとられば蝗にすつかりくはれてしまふ

量と氣溫とが直接農作に及ぼす影響のためにも常に天候を氣遣つてゐるけれども、この飛蝗の發生を憂へて、冬季の乾燥と溫暖さとには格別氣を採むものである。かうした四千年の經驗から來た農民の智識は恐るべきもので、最近の研究によつても雨量の多い年の、低溫な多には蝗の卵が堪へ難いことが分つた。因みに中國で飛蝗と呼ばれるものはダイミヤウバツタのことで、イナゴより少し大きく、雄は五糎餘、雌で六糎位の長さを持つてゐる。これがまだ卵や幼蟲の狀態である頃には藥劑を撒布すれば驅除されようが、成蟲の來襲に會つたら、支那の百姓は横隊に並んで箒や柳の枝を打振りながら聲を擧げてこれを逐ひ、用意してある水溝に追ひ込めて溺れさせる。又空砲を放ち銅鑼を鳴らして逐ふこともあり、石油を塗つた布片を風上に吊してその臭で去らしめたり、更に火を放つて燒くこともある。その情景は苛酷な大地の力に押しひしがれさうな平原を背景にして寔に痛ましいものである。尤もこのダイミヤウバツタはこの種に近い各種の蝗科と共に蚱蜢の名で、採つて油で炒り上げられ、支那下層社會の有難い蛋白質の榮養食として利用される。

飛砂

昭和十三年六月、蔣介石は黄河堤防を破壞した。濁流は京水より開封と鄭州の中間を奔流し、廣大な耕地を流し人畜を呑み、淮河を合せて揚子江に流込んだ。それ以來、舊黄河床は沙漠化してしまつた。その荒涼たる景觀は新開線の車窓より見ることが出來る。大小の砂丘は蜿蜒として横つてゐる。旋風が吹けば砂柱となつて天へ捩じ上る二、三米の砂柱が數本廻轉しながら移動する有様はもの凄い。又、北風が吹けば砂丘の大群は南方へ徐に進んで來る。飛砂は開封より蘭封にかけて吹寄る。

水の無くなつた舊黄河の河底、うどん粉の如き黄土である

一塵の風で鐵路は埋つてしまふ

せて來る。鐵道は一瞬にして埋沒してしまふ。華北交通鐵道従業員は晝夜それを看守し、埋沒したレールを掘出すに忙殺される、その苦勞は生やさしいものではない。防砂林を造るにも、水もなく、地面に塩を吹く荒蕪地では困難である。裏日本海岸地方に見られる砂丘除けの簾を立てたところで、この自然の暴威を防ぐには尨大な費用を喰ふばかりである。

それを防ぐ唯一の手段。それは黄河の水を適度に以前通り北流せしむる他はないのである。

蒙古オーラインホトクトに舍營する調査隊

石炭、鐵などの地下資源を始めとして、北支、蒙疆のもつ資源の數々は東亞の寶庫といはれるのにふさはしい。しかしこの寶庫には未だ開かれない扉が數多く存する。

眠る資源の開發はその土地のもつ性格の分析に始まり、文化の注入も隨伴せねばならぬ。嘗つて歐米人はこの寶庫の鍵を求めて幾度か長い探査の旅を續けた。だが、その探査は究極に於て略奪が目的であつた。この様な調査で寶庫の鍵が手に入る譯もなからう。

今、日本の學徒は中國の學徒と提携して默々と秘庫の扉を開くべく寧日ない調査の旅を續けてゐる。恩讐を越えて固く手を握る日、中兩國の學徒たちは交通施設は愚か、殆んど全く文化から見棄てられた奧地へ匪賊の妨害を却け、惡疫と闘ひつゝ大東亞の各民族の繁榮のために挺身するのである。

未だ眠つてゐる資源の數々、嘗つて侵略の刄をといでゐた米英にとつて羨望に耐へぬものがあらう。現下の戰爭は一面消耗戰である。戰前に用意された物資は忽ちに消耗する。その補充が出來ない國は敗れるのだ。我々は消耗戰に勝たねばならぬ。新しい資源を絶

大陸資源調査隊

オロンノール附近をゆく調査隊の牛車の列

オロンノールの宿營

えず齎すのである。指導者日本の學徒はそれ故に、戰友の國に武器なき戰士として挺身する。寳庫の扉は次々と開かれよう。そして扉の開かれる毎に中國の文化も向上する。

北支、蒙疆は戰ふ大東亞共榮圏にとつて正しく兵站基地である。

初夏風景

落穂拾ひ――同蒲線　蒲州にて

羊洗ひ——京漢線　固城鎭にて

北京第一國民學校

北京の邦人教育

兵隊さんに敬禮

大東亞戰爭の兵站基地といはれる北支にあつて、興隆日本の明日を擔ふべき、重大な責務を持つ居留邦人の子弟たちは、戰爭の息吹も生々しい、戰ふ大陸の現地に於て、日毎逞しく鍊成されてゐる。

北京の邦人子弟教育機關としては、中學・商業・靑年學校各一校、高女二校、國民學校一〇校（外に分敎場三）

幼稚園二がある。生徒數は中等學校男子が二千百名、女子が千六百名、國民學校は男女合計約一萬名である。

皇國臣民たるの基礎的錬成が教育の根幹をなしてゐることは、日本內地と何等變りがないが、外地なるが故に、特に善隣敦睦の教育が重視せられてゐる。日華學童親善會が年數回催されるのもこの意味からで、合同學藝會や遠足、運動會等を通じて、互ひに親和を深めて行く。

現地なればこそ、直接軍隊を訪れて將兵を慰問出來ることは、教育上極めて惠まれた環境にあると言ひ得る。が一面、ある高女の調査によれば、母國を知らない生徒が二〇%を占めてをり又國民學校時代無轉校の者は全體の八%に過ぎず、九〇%は數校を轉々として移り、甚しきは轉校十回に及ぶものすらあるといふことは、外地教育の大きな惱みである。

中等學校、國民學校を通じて貯蓄、學用品節約、步行訓練、集團訓練、防空訓練等と、教育の總てが戰爭完遂の一點に結集せられてゐる。

純眞無垢な若き魂が、祖國を遠く外地にあつて、強く逞しく、決戰下の皇國臣民として鍛錬陶冶せられ、國家有爲の材が北京から——北支から、陸續と御國に送られることを思へば、まことに賴もしき限りである。

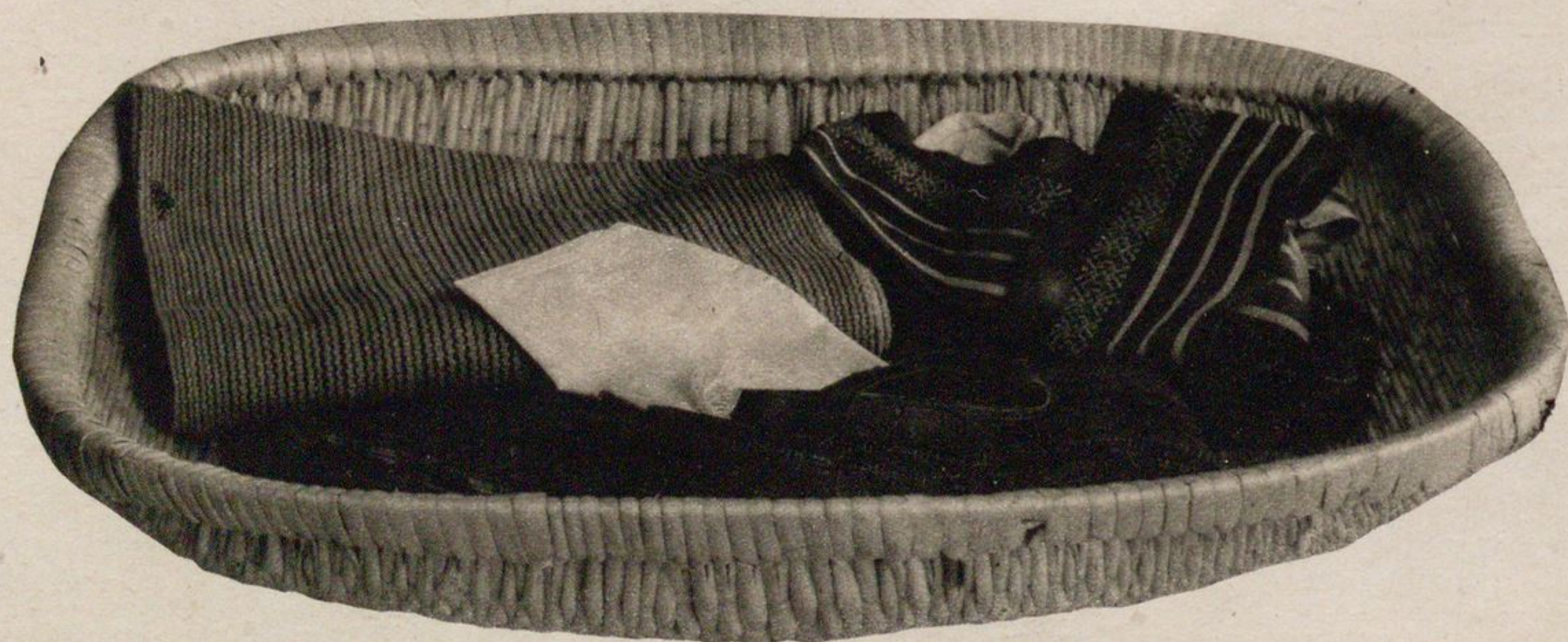
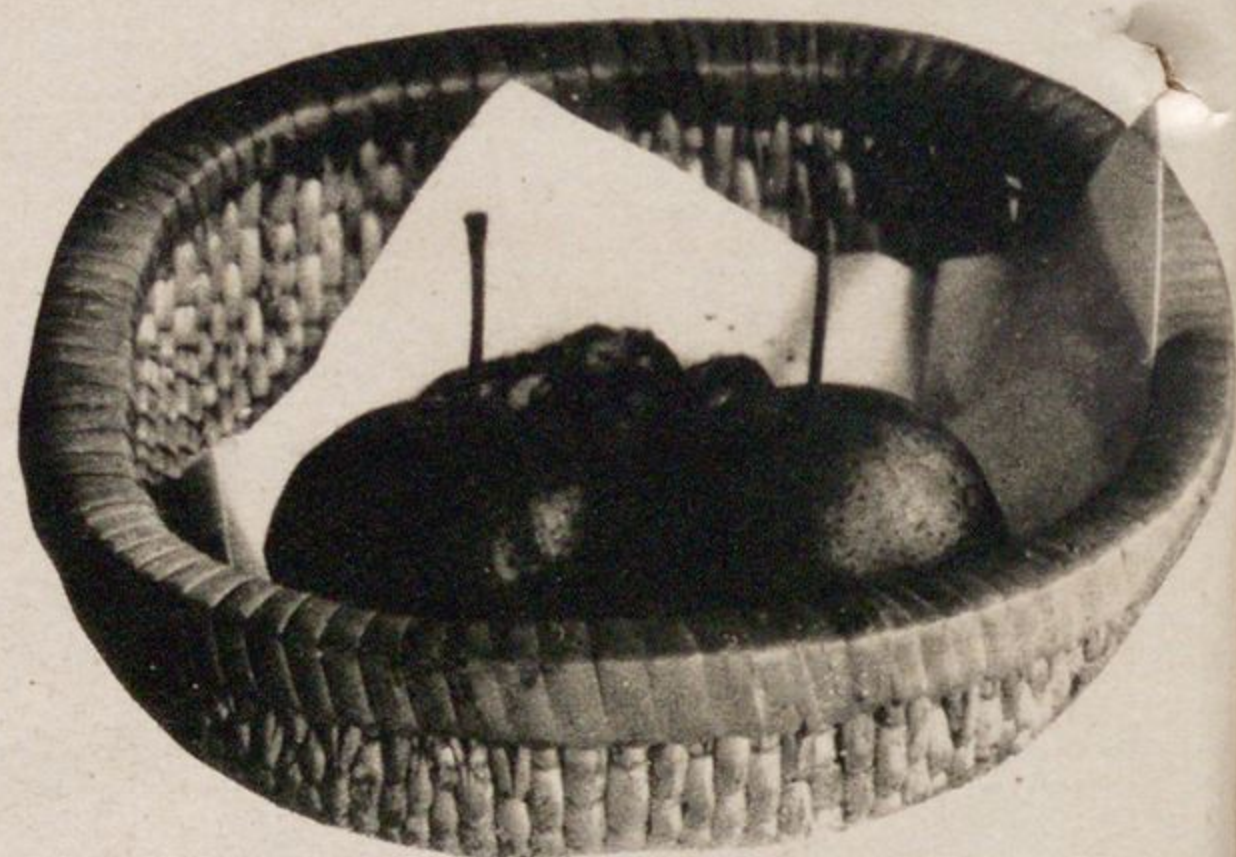
中央公園

野外講座

柳器

「華北では、廟市でも街の荒物屋でも年中賣つてゐて、珍らしくない柳の籠や笊ではあるが、是等の器の中には今も造る立派な民藝品がある。そして、中國の民族の心を語り、獨自の美しさを宿す、吾々在留日本人はこの美しさを日常生活の中に所謂（見たてづかひ）の精神にならつて

取り入れたいと思ふ。」
右は過般、北京王府井カネボー畫廊にて開かれた北京文化協會生活文化部主催の華北柳器展覽會に示された趣意書である。

これは現地生活は現地の品物で間に合はす、と云ふよりも一歩進んでよりよく生かしてゆく、しかも趣意書にも示された如くそこに健全なる民藝の簡素美を發見しようといふのである。

院子の日々

北京では、各戸で院子に一坪農園をつくり蓖麻を栽培し、實を收穫して獻納すべく今春から實施される

一國と一國との親善が唯一部の政治家同志の條約や協定だけで出來上るものではない。

近隣に中國人を持つ現地邦人の生活は色々な意味で極めて重大な意義を持つてゐるのである。言はずとも、語らずとも、我々の生活態度如何によつて、中國人に尊敬、親愛の念を抱かしめることもできるし、反對に輕侮離反せしめてしまふ場合もあるのである。

それならば、どんな心構へで生活すればいいのであらうか。それは極めて簡單である。

「日本人らしく振舞ふこと」即ち、日本傳統の美風を護ればいゝのだ。次に「中國人の人情習慣を理解すること」これだけである。

日曜日のおひるすぎ、隣組相集つてお茶などを立て、靜かなひとゝき、内地の香を偲ぶ

北京の邦人教育

香川豊三

海外に雄飛する人々の最大の悩みの一つは、子弟の教育問題である。

外地で生れた子供達を、如何にして日本の教育を受けさせたらよいか——子を持つ親は等しくこの問題に頭を痛める。それは今も昔も變らない。

外國では、或る土地を開拓する爲に鐵道を敷設する時には、鐵道線路の建設に竝行して、何よりも先に學校、病院、住宅を建築したといふ。しつくりした住宅に住ひ、病氣の時には十分の治療が出來、子供は安心して教育が出來る。これだけの條件が具備してをれば、人々は思ひ切つた進出が出來、腰を落着けて活動出來るわけである。

日本が日露戰爭に大勝を博した直後の明治三十九年頃の北京には、約三百餘名の邦人が居住してゐた。これらの人達も、子供の教育に當惑してゐたので、有志相倚り相談の結果、何等かの形で教育機關を設けることに決した。

明治三十九年二月十一日、紀元節當日、西本願寺出張所の一室を借受け、教師一名、兒童四名で、兎も角も始業式を擧行した。これが北京に於ける邦人教育の濫觴であるが、その內容は家塾的なものであつた。

その後計畫が進んで、北京日本人會と西本願寺出張所との共同經營で、支那家屋を銀千四百弗で購入して校舍とし、新たに教師二名の陣容で開校式を擧行した。時に明治三十九年十一月十一日。今度は小學校令に準據したもので、共立日本小學校と命名し、この日を開校記念日と定めた。

かうして北京の小學校は誕生したのであるが、それから約三十年間、支那事變勃發の昭和十一年頃までは、兒童數は大體、百名を上下する程度であつた。その間、在留邦人の熱意と努力で教育施設は素晴らしく充實し、北京に於ける模範校として、支那側教育者はよく參觀に來たものである。又父兄側でも、事、學校のこととなれば、惜しみなく負擔に應じ、雲烟萬里の異境にあつて日本的娛樂機關の全くない生活は、自然と學校の行事は卽家庭の行事として、學校と家庭——學校と全在留邦人、それこそ文字通り一體となつて遠足、運動會、展覽會、學藝會等の諸行事を樂しんだものである。かうして學校は守り育てられて行つたが、そのお蔭で、異境にありながら、子供たちは日本內地に劣らぬ立派な教育を受けることが出來たのであつた。

昭和十二年の支那事變勃發以來、急激な居留邦人の增加に伴つて、教育機關も年一年と增設せられ、現在では、居留民團經營の學校は、

中學校	一
商業學校	一
高等女學校	二
青年學校	一
國民學校	一〇
（外に分教場	三）
幼稚園	二

と、發展膨脹してゐる。

生徒數は、中學約千百名、商業七百名、高女千六百名、青年校三百名、國民學校約一萬名、幼稚園百二十名で、教師の數は、校長・教諭・訓導・保姆が約四百五十名、講師・指導員・囑託が約六十五名である。

內容

第五卷 第六號

外地の教育は、樣々な條件により、内地に於けるそれよりも、幾多の困難が伴つてゐる。氣候風土、生活環境などの相違もそれであるが、祖國日本を知らないこと、保護者の移動が頻繁であること等も、大きい理由の一つである。生徒の出生地を調べても、三府四十三縣はもとより、北海道、樺太、臺灣、朝鮮、滿洲國、中華民國と廣範圍に亙つてゐる。

今これ等を各方面から檢討すれば、先づ父兄の職業では、

	中學校	女學校
鑛業	一二	六
工業	八	二五
商業	六五	六六
交通業	四	〇
官公吏	六一	二七
敎員	一二	一三
會社員	二二〇	二二三
其他の公務自由業	一三七	一七
其他	六〇	二八
計	五七九	四〇五

右によれば、給料生活者が半數で壓倒的地位を占めてゐる。このことは卽ち一般居留民の構成狀態と合致するもので、大陸開發と建設に從事する俸給生活者と、これに附隨する商人とが根幹となつて北支四十萬邦人が構成せられてゐるのである。

從つて、父兄の轉勤に伴つて轉校せねばならぬので、生徒の轉校回數も自然增加するわけで、學校側としては教育上大きい留意點となるわけである。

第二高女の統計に依れば、國民學校時代無轉校で終始した者は四〇五名中僅かに三二名、七・九%に過ぎないことが判る。

轉校 無	三二	七・九%
同 一回	一二五	三〇・九%
同 二回	九二	二二・七%
同 三回	六六	一六・三%
同 四回	四四	一〇・九%
同 五回	二四	五・九%
同 六回	八	二・〇%
同七回以上	七	一・七%
未調査	七	一・七%
計	四〇五	

支那事變勃發以來、六年を經過した現在としては、事變當時北京で一年生に入學してゐた者が、初めて國民學校を卒業したわけだから、少くとも轉校一回といふのが、普通になるわけである。そこで在支年數を調べて見ると、五年未滿が殆ど大部分であることを發見し、轉校は餘儀なきものであることを知ることが出來る。

在支一年未滿	五九
同 一年以上	七三
同 二年以上	七六
同 三年以上	九九
同 四年以上	五八
同 五年以上	一六
同 六年以上	五
同 七年以上	九
未調査	一〇
計	四〇五

これ等の轉校者が、内地から渡つて來た者ばかりかといふに、必ずしもさうではない。海外で生れた者もあり、或ひは母國で生れるには生れたが、物ごころつかぬうちに、父母に伴はれて海を渡り、朝鮮なり滿洲なり支那なりで育つた者が相當ある。この者達は祖國日本の姿を知らないのである。山紫水明の日本、純粹の日本社會組織、社會生活、或ひは家族主義的生活等は、繪で見、話にこそ聞け、どうしてもはつきりとしたものを掴むことが出來ないのである。母國を知らない生徒は

海外で生れた者	八九
學齡前に母國を去つた者	八二
計	一七一

で、全校生徒八五二名の二割を占めてゐる。この傾向は年と共に增大し、特に國民學校兒童の大半が現地生れで占める日が間近かに迫つてゐる。母國を知らない第二世に、如何にして眞の日本の姿を知らしめるか、日本精神の眞髓を如何にして把握せしめるかといふことは、外地教育に課せられた一大命題である。

外地にある學校とはいへ、國民學校令に準據し、その他の學校も夫々法規に從つて教育が實施せられてゐるからには、内地の學校と本質的には何等變りがないのは當然である。

各校には「興亞室」が設けられ、父兄その他出征軍人の英姿や戰歿者の遺影を掲げ、或ひは時局教育資料を展示して教育に資してゐる。

國民學校の教科の中で、理科だけは氣候風土の關係上、どうしても内地同樣の教材では都合が惡るいので、華北教育會北京分會編纂の現地に卽したものを使用してゐる。

衞生的環境としては、内地と比較にならぬ程惡條件下にある北支のこととて、生徒兒童の保健衞生については、特に深甚な注意が拂はれ、胸部疾患の早期發見、トラコーマの撲滅、齒牙の治療等は勿論のこと、精神的な錬成を加へて、各種の鍛錬方法が採られてゐる。大體體格はヒョロ長型で、從つて耐久力に乏しい。又この爲胸部疾患が多い。他の理由もあるであらうが、缺

席者が非常に多く、內地では、學級の七割位が殆ど無缺席で一年間通せるのに比し、北京の國民學校では、やつと三割程度に過ぎない。

戰時下少國民の錬成には何處の學校でも特に眞劍な努力が拂はれてゐる。教育の總てを擧げて、『戰爭に勝つ爲に』の一點に指向し、貯蓄、學用品節約、步行訓練、集團訓練、防空知識の徹底と實踐等と、あらゆる面に立つて身心共に鍛へられ、立派に國家のお役に立つ人間——大東亞を護り育てねばならぬ皇國日本の次代を擔つて御奉公の出來る人間が育成されつゝある。

國民學校關係では、支那側學校との間に日華學童親善會が結成せられてをり、北京市公署教育局の手で年五回催しが開かれることになつてゐる。日華合同學藝會もその一つで、和やかな交驩風景を釀し出す。また近郊の古蹟たる萬壽山へ合同で遠足し、行つた先で寫生會を開いてその場で展覽、小運動會もやつて日華學童が手をとり合つて技を競つたこともある。親善會は向上と親睦を狙つたものであるが、他國人の中に伍し、善隣協和の大義に立つて生活せねばならぬ日本人としては、この善隣敦睦の教育は極めて重要な項目の一つなのである。

又學校では、機會ある每に部隊を訪ねて慰問し、軍病院を訪れては傷病將士を慰めることに努めてゐる。內地の子供は、慰問袋や慰問文によらねば、遙か戰地の兵隊さんをお慰めすることが出來ないが、その點は、現地に居るお陰で、直接慰問が出來て、小さい胸に溢れる心一杯の感謝を捧げ得ることは、教育の立場から見ても極めて意義深いものがある。

一方、現地邦人住宅の不備が齎す教育上の弊害も、看過出來ないものがある。怒濤の如く急激に邦人が增加した結果、住宅難は甚だ深刻で、やつと見出した住居は、支那家屋に一寸手を加へた程度のもので、內地の住宅に比すべくもない。從つて、間取り、設備、その他一切が不完全なため、家庭に於ける日本人的躾けが出來かねる。この缺陷を補つて規律的生活訓練をするためには、宿泊訓練の施設が望ましい。

又、學校給食も研究題目の一つである。安價で榮養價の高い現地食が色々ある。これ等は家庭食にも當然採入れられるべきであるが、子供の辨當に對しても考へることが出來る。食物に關する現地の研究がもつと進んだら、辨當統一、偏食矯正の意味からも學校給食は研究されて然るべきものである。

ともあれ、北京では教育者も保護者も兒童生徒も、日本內地に負けてはならぬと、大いに張切つてゐる。外地なるが故に一層緊張してゐる。

今春から商業學校に附設せられた第二本科は、四年制の夜間商業學校で、本年度は第一學年生百名が入學してゐる。この百名の生徒を見るに、年齢は十五歳から三十六歳まで殆どが晝間は職業に就いてゐる者で、會社員がその半數を占めて四十八名、次は商店勤務者で全體の約三割、その他軍屬、公吏などもあつて、本當に無職で學業のみに專念してゐる者は一割五分程度に過ぎない。現地人の旺盛な向學心を物語つてをり、晝間は華北建設の國策的使命に働き、夜は自己の修養に努めてゐるのである。

本格的邦人教育は事變以來開始せられたものであり、日なほ淺き今日、施設內容共に著々整備を見つゝあるは賴もしき限りである。これでこそ、現地人はじつくり腰を落着けて働くことが出來るといふものである。今春は華北高等工業が開設せられた。各種高等程度の學校が設けられた曉に、初めて普通、中等、高等の教育が現地で受けられることとなり、居留邦人の子弟教育問題は一應解決される日なのである。

現地に育つ少國民

螻川内　滿

現地に住む邦人の直面する大きな惱みとも云ふべきものが二つある。一は住宅の問題であり、他の一つは子弟教育の問題である。共に切實な問題であるが、殊に教育は、國家の隆替に關する大事である。私は今、現地に育ち行く少國民の姿はどうであらうかと云ふ、この事を少し考へて見たいと思ふ。

然し、在支僅かに四年足らずの短い經驗であり、而も唯北京の國民學校の實際といふ極めて狹い限られた世界から覗いてみたのであつて、謂ゆる「葦の髓から天覗く」式の私見に囚はれた的外れの見方であるかも知れない。

先頃私は、渡支以來奉職して來た北京の或る國民學校の「學校史」の編纂委員の末席を汚し、その事に當つたことがある。この學校は開校以來、三十七年の歴史を有し、北京に於て最古の學校であり、北支に於ても屈指の歴史を有する學校である。同校の重要日誌の最初の一節に、次の如き記事があつた。

明治三十九年二月十一日

本日紀元節ノ佳節ニ當リ、有志相倚リテ羊肉胡同西本願寺出張所ノ一室ヲ借受ケ、兒童四名ヲ集メ、教師高見健一氏ヲ聘シ、家塾的教育ヲ施サント始業式ヲ行フ。

同年十月五日

北京日本人會、西本願寺出張所共同經營ニテ、東四牌樓六條胡同ニ家屋ヲ銀千四百弗ヲ以テ購入シ、共立日本小學校ト命名シ、小學校令ニ準據シ、教授スルコト、ナリ、コ、ニ引越ス。

同年十一月十一日

教師高見健一氏去リ、栗田英四郎氏外一名ノ教師代リ、教授ヲ擔當スルコト、ナリ、開校式ヲ擧行ス。爾來本日ヲ以テ本校開校記念日トス。

明治三十九年と云へば、日露の大戰に大勝した翌年である。私はこの數行の文字の間に日清日露の兩役に快勝し隆々と發展して行つた皇國民の意氣とそして昔も今も變らぬ海外へ雄飛した先驅者の人知れぬ惱みを見た。

斷然たる決意の下に、勇躍故郷を離れて來た自分達であれば、氣候風土人情の異なる中に、衣食住の不自由は忍んでも、我がいとし子だけは例へ異郷の地にあつても立派な日本人に育てあげたい、育て上げねばならぬと云ふ親心が、僅か四名の兒童達のために、たとへ家塾的であらうとも、學校を建てさせたのであらう。當時の銀千四百弗が、今日のどれだけに相當するのか私は知らない。併し、四名の兒童達のために支拂はるべき費用としては大きな負擔であつたに違ひないと想像する。而も僅か半歳の間に小學校令に準據する共立小學校の體裁を整へるに至つたこの熱意は、並々ならぬものがあつたと考へられる。

地理學の泰斗田中啓爾博士は嘗つて「歐米の植民地侵略は教會を基地としてなされた。從つて、歐米人のある所には先づ教會が建てられた。日本人は海外へ發展すれば先づ神社とそして學校を建てた」と云ふ意味のことも云はれたことがあるが、誠に北京に於ても明治三十九年開校の同校の歴史は、その儘北京の日本人教育史であり、また北京邦人發展史そのものでもあると云へる。

北京村教育風景

激增する在留邦人の惱みの種である子弟教育の問題を解く鍵の一つとして北京に於ける邦人教育史を考察することも萬更徒爾ではあるまい。以下しばらく北京村時代の學校教育風景の漫歩を試みよう。

北京村と云ふのは、當時北京に居留してゐた邦人が、故國を懷かしむ心から自分達の住む北京の土地をかう自稱してゐたのである。村民はと云へば、同校開校當時に於てもその數三百名餘り、これを三十幾年を經過したに過ぎぬ今日の在住邦人十一萬を越ゆる盛況と想ひ合せると、轉々感慨深きものがある。

故老の話に據れば、當時の子供達は歩いて通學する者などは一人も居なかつた。と云つて何も當時の子供が皆、足が惡かつた譯でもなければ、贅澤におごりたかぶつてゐたのでもない。當時の北京の道路は――勿論まだ舗裝な

どある筈はないが、物凄い埃で、道を歩くと全身皆白く埃まみれになる、その上、便所の設備のない支那のことゝて道路には黄金色が溢れ、歩かれたものではない。十錢も出せば洋車はくたくたになるまで走つたと云ふ頃の事だし、不潔な道を埃まみれになつて歩いて靴や着物を臺なしにするより、馬車や洋車に乘る方が餘程安上りだつた。

尚又、かうした衛生上、經濟上の理由からばかりでなく、支那の風習として、外へ出る時歩いて行くのは下層階級であつて、少くとも大人と云はれる者は車に乘るべきであつた。當時北京に住んでゐた者は、祖國日本を代表した大人である。少くとも各自は、さうした自負を有してゐた。日清日露の兩役に大勝した大日本國の大人は、苦力と共に埃まみれで歩いてはならなかつた。かうした面子からも通學兒童は洋車を使用しなければならなかつた。

當時、北京隨一の學校として發展して行つた同校の參觀者名簿や、寫眞帳を繰ると、伊集院彦吉、松平恒雄、小幡酉吉、林權助、芳澤謙吉、有田八郎大橋忠一等々、歴代の外交官を始め、在住陸海軍將星、支那側要人の名も見られる。その他、國語の恩人上田萬年博士や、廣安門事件の櫻井大佐が蒙古王德王を案内して來訪された記事も見られる。

畏れ多くも　秩父宮妃殿下も同校幼稚園に在學遊ばされたと云ふ光榮に浴してゐる。

とりわけ光榮に輝いてゐるのは、北京に御差遣になられた侍從武官が、大正十三年から支那事變の始まつた昭和十二年まで、毎年御來校になつたと云ふことである。

試みに同校の大正十五年當時の記錄によつて侍從武官御來校の模樣をうかがへば

大正十五年五月二十日

職員全員及兒童代表、東站（今ノ北京驛）ニ堵列シ、侍從武官ノ御到着ヲ奉迎申シ上ゲル。勿論軍官民一同御出迎へ申シ上ゲタノデアル。

同年五月二十一日

親シク侍從武官ノ御來校ヲ戴ク、校舍内外ハ掃キ洒メラレ今日ノ晴ノ日ニ初夏ノ氣澄ミ、アカシヤノ樹林ノ若葉ハ微風ニユレル。川岸侍從武官御到着。校長ノ先導ニテ貴賓室ヘ御案内申シ上ゲル。外地北京ニ於ケル力强キ邦人教育ノ實相ヲ申シ上ゲル學校長ノ眼ハ感激ニウルンデヰタ。次ニ各教室及ビ學校設備ヲ學校長ノ案内デ御巡視、音樂室、作法室百七十人ノ兒童ノ學校ニシテハ、餘リニモ立派ナ大講堂ヲモ限リナク御覽ニナル。折カラ北京村ノ有志三々五々講堂ニ參集、兒童ト共ニ侍從武官御來校ノ感激ヲ分ケアツテ固唾ヲノム。侍從武官ハ壇上ヨリ皇室ニ關シテ約四十分間講演。拜聽シタ兒童父兄一同ハ何レモ身ノ異邦ニアルヲ忘レ、唯〻聖恩ノ辱ケナサニ感激、恐懼シテ、御皇室ノ彌榮ヲ祈リ奉ル。川岸侍從武官ノ隨行トシテ本庄將軍、小林步兵隊々長、下永副官、渡參謀長其他。御講演ノ後、御酒並ニ御菓子ヲ御下賜アラセラル、誠ニ光榮無上ナリ。

かうした感激は、光榮は、外地にある學校であつて始めて味ふことの出來るものであらう。

在留邦人の協力一致

一體、教育の仕事は當事者のみが如何に手を盡し努力してみた處で、周圍の者がこれに無關心であつたら殆んど何の效果も擧げることは出來ない。

これは內地外地を問はず同じことである。北京村の教育の跡を顧ると、この點では實に滿點であつたらしい。お互に身異鄉に在つて賴る者とては數少なき邦人のみであつてみれば、自然協

さくらフヰルム
躍進日本の代表的フヰルム
一般用に　スペシアルクローム
戶外用に　パンクロF
夜間用に　パンクロUSS

力し助け合つてゆく様になるのかも知れない。そんな時、各種の行事は自然學校を中心として行なはれてゆくことは今日でも內地の農村等に於て見られる通りの美しいものである。

北京村もその例に洩れなかつた。而もその協力は、より華やかで、より切實であつたことは當時の記錄の到る處に見受けられた。

次は前述「校史」所載の當時の學校長大越親氏（在任昭和十年—同十六年）の北京村回顧談の一節である。

前略—北京村の行事は學校の行事、學校の行事は村の行事で別に區別はなかつた。先づ正月は元旦に村の人は大使館の御眞影拜賀式に行かぬ者はない。床屋さんも疊屋さんも八百屋さんも、皆禮裝で奉拜に參り御冷酒を頂いて來る。四大節とも學校の兒童は大使館で拜賀式を擧行する。大公使、參事官、陸海軍武官が金ピカの大禮服に夫人同列で嚴かに式が行はれる。校長が勅語を奉讀するので高等官の方々より、うちの學校の校長の方が偉いと思つてくれる。そして歸りにはお祝ひのお餅や御菓子を高等官夫人連の手から分けていただくので、子供達は四大節を待ち焦れたものだ。この日、女の子は大抵振袖姿の和服で純日本式、羽根つきなどして樂しく遊ぶ。

晝頃、民團の公會堂で祝賀の宴が開かれ、北京村の軍官民擧つて盃を高く捧げて聖壽の萬歲を高唱する。

中略—忘られぬ行事に步兵隊の記念祭がある。東交民巷の兵營はこの日程樂しい日は無い。

子供達はその日を指折り數へて待つてゐる。待望のその日が來ると、嚴肅な式と共に、御眞影を奉拜する。お祝ひの菓子や餅を頂戴すると、餘興が始まる。村民總出で、營庭は黑山になる。子供達は兵隊さんと唱歌を歌ふ。レコードを聽く、手踊りが始まる、芝居、角力、擊劍、それが終ると御神輿が出る。

兵隊さんと子供達は、ワッショイワッショイと大騷ぎ、一方では盆踊りが始まる。庭一ぱいの大きな輪になつて踊る。これこそ本當に祭りと盆が一緒に來た北京村の一番嬉しい、一番樂しい祭であつた。

又、村の運動會も東單練兵場で、軍官民一大合同で開催された。朝から日本人と云ふ日本人は、晝食を洋車に一家全員の分を積んで集る。兵隊さんも兒童も奧さんも娘さんも、みんな競技に參加するのである、云々

其他、遠足、武道納會等々と、全く軍もなく官もなく民もなく、一つになつて諸事が行はれたのである。

また父兄は保護者會を組織し、全面的な學校の支援をして來た。これは內地等の形式的な保護者會とは趣を異にし、校舍の新築から職員住宅の世話、學用品の共同購入、支給等、いろいろと力を盡した。

百名そこ〳〵の生徒に常に七人の教師を有してゐたといふから、一學級十四五人の生徒に一人の先生が附いてゐたといふ割合になる。これを見ても父兄の熱心さがうかゞはれる。今度新らしく國民學校の教科の一つとなつた武道も、同校では三十年以前から實施され、武道の道具も三十組準備されてゐたのである。これ等も總て保護者會の費用でなされてゐた。

また、今でこそ問題にならぬが、當時はまだ外地に在つては何と云つても英語が必要であつたため、當時七十弗と云ふ高給をもつて英人教師を雇入れてゐたと云ふ記事さへ見える。

「北京小學校は現地の學習院に」と之は當時の父兄の合言葉であつた。

軍はまた、惜みなく協力の手を延べられ、度々その兵舍の一部を開放して校舍に使用させたと云ふ記事も見受けられた。大正二年から大正末にかけては、體操の先生は總て現役の下士官が當つたと云ふ記錄も殘つてゐる。いかめしい營庭に運動具を並べ、大きい兵隊さんの號令で可愛い子供達の體操をする姿を想像するだにほゝゑましいものがあるではないか。かくて村全體が教育場となつてゐた當時の北京村は、思ふに羨ましいものであつた。

國際關係と少國民

以上の樣に觀て來ると、現地に育つ子供達は如何にも平和に無風狀態の中に暮して來たかに思はれるが、決してさうではない。變轉する國際情勢の中に揉まれ〳〵て、度重なる內亂、事變に身を危險に曝しながら過して來た事も一再ではなかつたのである。

明治四十五年二月二十九日

市內ニ暴徒起リ、掠奪暴行甚ダシキタメ、在留邦人ノ避難スル者多ク、軍隊ノ內、甚ダ狹隘トナル故ニ小學校舍、幼稚園舍共ニ開放シテ其ノ宿舍ニ充ツルコト、セリ。ソレガタメ三月三日マデ小學校ハ休校トシ、幼稚園ハ當分開園ノ見込ミ立タズ休園トセリ。

同年三月四日

在留避難者ハ隊內ヨリ他ヘ移轉セル

モ、駐屯兵増加ノタメ小學校モ當然他ニ移轉セザルヲ得ズ、同日公使館員下瀬軍醫正宅ノ食堂ト、杉野北京郵便局長宅ノ食堂トヲ教室トシ、一時、此所ニテ授業ヲ續クルコトヽセリ。

大正六年七月十二日
復辟運動ニ關シ、市内騷擾甚ダシキタメ、駐屯隊ヨリ派遣セラレタル軍隊、居留民保護ノタメ學校ニ宿泊サレ、十三日正午歸隊セラル。

大正八年六月十九日
最近支那人間ニ排日的思想ヲ抱ク者多キニツキ、警察署ト打合セノ上兒童並ニ父兄ニ對シ注意書ヲ發送ス。

同年十二月八日
本校兒童ニ對スル支那人ノ暴行被害狀況調査ヲナシ、報告ス。

同年十二月十二日
連日支那人ヨリ、本校兒童ニ對シ暴行惡戲侮辱ヲ受クルニツキ、民會及ビ學校ト共ニ打合セ調査ヲ具シ、波多野警察署長ニ申報ス。

同年十二月十八日
午後七時ヨリ臨時父兄會ヲ開催、排日暴行ノ件ニツキ對策ヲ協議ス。而シテ小幡公使宛陳情書ヲ提出セリ。

陳情書

近來、北京日本小學校生徒、學校往復ノ途中ニ於テ支那人ヨリ被ル迫害ニ對シテハ已ニ學校當局ヨリ數回、ソノ事實報告ニ及ビ居リ、右ニ對シ貴公使ヨリ支那官憲ニ對シ御警告ノ結果、生徒ノ往復ニ際シ北京警察ヨリ平服巡査ヲ同行セシメ居ル樣認メラレ候。其ノ後ニ於テモ尚被害事實ノ根絶ヲ見ルニ到ラザルハ生徒父兄一同深ク遺憾トシ、不安ノ感ニ堪ヘザル處ニテ、從テ支那官憲ニ於テモ一層取締ヲ嚴行シ、斯ル不安狀態ノ根絶ヲ期スル樣、御交渉相煩度切望ノ至ニ候、右父兄會ノ決議ニ依リ及陳情候也

大正八年十二月十九日

父兄總代　鈴木　重孝
菊池　榮

在北京特命全權公使小幡酉吉殿

大正十四年六月三日
北京市内ニ排日學生運動猛烈トナルタメ、授業午前中ニテ兒童ヲ各歸宅セシム。

同年六月十日
北京市内ノ學生大會ガ開カレ、排日空氣濃厚ニツキ、危險ヲ憂慮シ學校ヲ休業ス。

同年六月十四日
排日學生ノ横行盛ンニシテ危險限リナキ故、廣田校長芳澤公使ヲ訪問シ至急休校ヲナスベキコトヽナリ、各兒童ノ家庭ニ電話又ハ急使ヲ以テ通知ス。

大正十五年三月十三日
排日暴行頻々タルニヨリ、波多野日本警察署長ヲ訪ヒ、十分打合セヲナス。

同年三月十五日
本日ヨリ支那側巡警、兒童ノ通學ニ對シ特ニ警戒ヲナスコトニナレリ。

同年四月五日
支那内亂ノタメ、一昨日ヨリ北京市上空ニ飛行機盛ニ來リ、爆彈ノ投下ヲ始メ、市民極メテ不安ニ襲ハル。本日モ一機當校上ヲ飛翔ス。

同年四月十日
今曉一時、國民軍入城、執政段祺瑞政府軍ニ對シ武裝解除ヲ迫リ、東四牌樓附近ニ機關銃、大砲ヲ据エツケ電話不通ノ由ニツキ學校モ一時動搖セルモ休校ニハセザリキ。

昭和三年六月七日
猛烈ナル學生排日運動ノタメ、本日午前中ノミニテ午後休業トス。
午前中、公使須磨書記官來校、時局ニ關スル注意訓示アリ、更ニ校長ヨリ詳細ナル注意アリタリ。

昭和六年九月十八日
滿洲事變突發ス。

同年九月二十八日
排日運動猛烈ニシテ暴行侮辱サルヽ兒童二十數名ニ上リ、止ムナク五六年生ダケ授業ヲナシ他ハ休校スルコトヽセリ。

同年十一月二十七日
昨夜、天津ニ於テ日支兩軍ノ衝突アリシ由ニツキ、兒童ニ一層ノ注意ヲ與フ。

昭和七年十月二十八日
支那ノ排日暴行頻々ナル故、對策ヲ協議ス。

昭和十二年七月八日
蘆溝橋デ日支兩軍衝突、五六年ヲ歸宅セシム。

同年七月九日
市内戒嚴令ヲ布ク。

同年七月二十七日
午前六時、大使館ニ引揚ゲ命令アリ正午マデニ集合ノコト、森訓導大越校長校内ヲ巡視ノ上、校僕ニ警備ヲ依賴シテ引上グ。

同年七月三十日
本日避難ノ小學兒童調査セシモ、十餘名ナリキ。

昭和十六年十二月八日
對米英國交斷絶、東交民巷交通遮斷學校前ロックヘラー病院接收、兒童ニ注意ヲ與ヘテ午前中ニテ歸宅セシ

ム。

以上の同校史重要記事欄からの拔萃を見ても分る通り、打續く支那國内の革命、内亂、事變、或は戰爭に依る排日蔑日の嵐の中を、强く生き拔いて來たのである。或る時は又皇軍正義の軍事行動を目のあたりに見て來たのである。

一命以て大使館に籠城した者もあり彼の通州事變に於ては、噫その一命をまで無慘に失つた可憐の學童が三名もあつたのである。

か丶る苦難の中を生き拔いて來た現地の少國民達を思ふ時、私は胸があつくなる。

現在の現地少國民

以上、私は過去の在留邦人の子弟教育の樣々な姿を、良かれ惡かれ拾つてみた。これは現在の現地少國民の本當の姿、あるべき姿を本當に知り度いためであつた。

苦難の道を乘り越えて來た現地の少國民にも今輝かしい光が訪れて來た。大東亞の樂園建設を目指す燦然たる日本の國威は、現地に育つ少國民に大きな目標と力とを與へた。

現在北京市内だけでも、十校近くの國民學校に通ふ八千を越ゆる學童がゐる。

華北全體では三萬何千の國民學校兒童が學んでゐる。此等の兒童を斷じてアメリカ在住の第二世の如くにしてはならぬ。内地に育つ少國民同樣、否むしろ他民族の間にあつて成長するこの兒童達を、内地の兒童より一層强い日本精神に燃ゆる國民に仕上げなければならない。この兒童達を大陸の捨て子にしてはならぬ。

現地に育つ少國民教育に殘された問題はまだ數々ある。ちよつと考へてみただけでも、櫻花一片見られぬ黃土の上で「さくら、さくら」と無心に歌ふ子供達、祖先の墓所も知らぬこの兒童に、お盆が近づきましたと云ふ、この感じはどうして敎へるか。

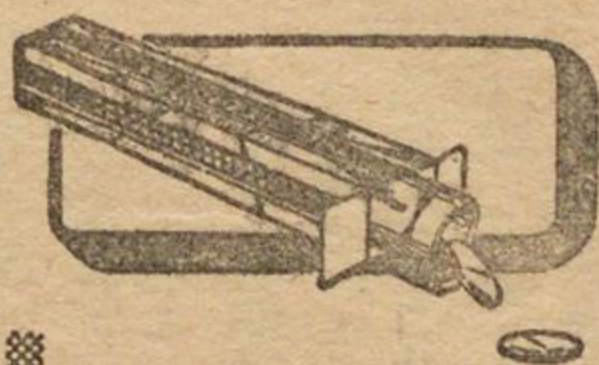
お祖父さん、お祖母さんと云ふ言葉を子供達は心の中でどう受取つてゐるのであらう。兒童を取卷いてゐるものは支那の色であり、支那の香であり、そして支那の音である。噫、この中を生き拔いて日本精神の華を咲かせるには如何にすればよいか、考へれば惱みは山の如くある。

惱みは兒童達の側ばかりではない。親達の側にも、進學の問題が大きく手を擴げてゐる。

國民學校を現地で卒業させて、中等學校をどうしよう。現地にも中等學校はある。併し、そこを出て更に上級學校に進む時、どうであらう。親達にしてみれば眞劍な問題である。

北京にも本春より高工が開設され、現地に於ける進學の道も開けて來た。だが我々はこの苦しみ惱みに負けてはならぬ。その困難を克服して大東亞共榮圈確立の日に備へねばならぬ。そのためには、その惱みを解決し、苦しみを征服して行く方途を、考へねばならぬ。苦しみの中に道は自ら開けて行く筈だ。それには周圍の溫い理解と、當事者を中心とした協力一致が何より必要であることは北京の邦人敎育の歷史がよき範を敎へてゐる。

私は内地の人々にも、現地に育つ少國民をこの困難な條件を乘切つて立派な皇國民となすために、溫い同情と十分の理解をいたゞき度いと思ふ。

（筆者・北京西郊第一日本國民學校訓導）

石山福治編著
最新 支那語大辭典 價一〇・〇〇 送料・四五
井上靜一著
增補改訂 伊太利語辭典 價三・五〇 送料・三〇
第一書房

連鎖狀球菌
葡萄狀球菌
化膿性
急性慢性諸疾患に依る
中耳炎
扁桃腺炎
【適應症】
産褥熱、敗血症、肺炎、盲腸炎、面皰、丹毒、急慢性淋疾、化膿性婦人科諸疾患等
錠剤（一〇、三〇、一〇〇錠）
トリラックス錠
元發賣製造
東洋製藥貿易株式會社
大阪市東區道修町

北支と鎭守の森

遠山正瑛

最近、私は北支二月號誌上で加藤新吉氏の東城記を讀んで、その中に北京神社が黄塵の吹き卷く裡にむき出しのまゝ、餘りにも殺風景に建てられてゐると云ふことに冷水を浴びせられた感を覺えずに居られなかつた。此處に首題に就て稿を起す次第である。

筆者は、昭和十年九月から十二年九月に至る間、北支那の園藝研究の目的をもつて北京に在住した。其頃既に北京神社造營の計畫が、有志の人々によつて考へられてゐた樣であり、二三の人々からは神社造營と關連して櫻の植樹問題を話された。

當時、私はアルカリ土壤と、冬期、特に開花期前後の乾燥の二點から、相當困難な問題と考へ、北支に廣く野生分布する山桃を砧木としての苗木養成による他望みないものと云ふ意見を、當時土地の新聞にも發表したのであつた。その第一の試みとして昭和十二年二月、私は北京の寓居で京都植物園から染井吉野の穗木を取り寄せ、豐臺附近から持つて歸つた山桃砧に接木を行つてみたが、數十本のうち、遂に一本も活着せずに終つた。これは、遠路を取り寄せた穗木の狀態が惡かつたのと寒氣と乾燥時の管理の不適當によるものと思ひ、京都の大學に歸つてから更に接木職に依賴して京都植物園の實生山桃砧に接木を繰り返した。併しこれ又失敗に終つてしまつた。

其後は、北支の花廠が行つてゐるやうに芽接によつて試驗を行ふ計畫であつたが、色々の事情でその機會を得ず今日に至つた。

先年、鐵道省觀光局の人が北京からの歸途、北京の櫻の植樹の問題に就てわざ〳〵訪ねて呉れたし、又、北京の知友からも、或る新聞の「北京とさくら」の座談會の記事を送つてくれたりした。

×

大東亜戰爭の進展とともに、大日本忠靈顯彰會支援のもとに市町村に忠靈塔の建設が各地に行はれ、忠靈塔境域の植樹造園の問題などが私のところにも澤山持ち込まれて來る。

加藤氏の東城記の一說は、日本內地の豐富な樹種による植樹計畫による境域の森嚴化と對比して誠に寒心に耐へぬものがある。春、柳絮の亂れ飛ぶ中に心行くまでに北支の春を樂しみ、夏槐樹の木蔭の街を北海公園に到り、或は雪の朝、中央公園の柏の老木に千年の綠を眺めた私には、想像するさへ耐へられぬ淋しみを感ずる。

我々日本人が山紫水明の地、日本に生れ落ちてその鄕里に物心づくと、そこには鎭守の森が常に敬神崇祖の念とともに鄕里の地を印象づける。我々が鄕里を離れて生活すれば、常に鎭守の森を中心として鄕里の思出がくりひろげられる。敬神崇祖の念こそ我々が天皇に歸一し奉るに他ならない。更に此の觀念は抽象的に鎭守の森となつて深く我々の心に刻みつけられたものと考へられる。

北京に在住する邦人の生活の中心であるべき北京神社こそは、在住邦人の鎭守の森であり度いと私は念願する。

少しく話は橫道になるかも知れないが、私が北京に生活した頃、北支生れの一日本青年からこんな話を聞かされた。『日本內地は決していいとは思はない。第一、道を尋ねても、左に行くと大きな杉の木があるとか、ケヤキが見えるとか、或はマキの生垣があるとか、實に我々には、不愉快な言葉が多い』と云ふのである。私は一種の淋しさ、物足りなさをその青年の上に感ぜずにはゐられなかつた。日本に生れた人々にとつては、何のことはない、生活の中の植物である。

私は嘗て、屢〻天津に遊んだ。日本租界（編者註・現在興亞第一區）の人々が春の宵に、夏の夜に、或は秋の日に外國租界に慰安を求めて散策する。元の英國租界の公園に、冬の日を浴びながら休養をする日本人も少なくなかつた。それは日本租界が道路と家との他、都市生活に必要とされる適當な休養廣場も運動公園もなく、唯大和公園が閑散としてあつたことを思ひ出す。空地があれば家を建てゝ家賃を稼ぎ、住宅の建築には植樹造庭費を一文も見積らぬと云ふのが日本人に多い樣に思ふ。日本內地の優れた自然の大きな環境の中にあつては、さした不便もないかも知れぬ。

尙、北京神社の境域に就ては少からぬ問題が殘されてゐる樣に想像する。

加藤氏は『松とか櫻とかを植ゑるが容易に活着しない。それはあだかも祖國の生活や思想をその儘、大陸に生かさうと努力してゐる日本人の現下の姿に似てゐる』と云つてゐる。誠に味はふべき言葉とも云へる。

數年前の「さくら」談議の座談會で萬壽山內の櫻の植樹問題に就ては多少異論があつた樣であり、筆者もこれに就ては輕々しく贊意を表しかねる一人である。萬壽山を生かし、眞に櫻を生かしての技術的取扱ひは中々簡單には困難であるからである。

私は近年、山陰地方の植物生態學的の立場から神社の社叢の調査を行つてゐる。その際に時として社殿に近く植込まれたプラタナス（鈴懸の木）の植樹によつて神社の風致を根本的に破壞し去つてゐる例を見出すのである。プラタナスが外國樹種だからと云ふばかりではない。植ゑた人の氣持ちは外國樹種で珍らしいから神社にでも植ゑようと云ふのであらう。風致的な地域の植樹を樹木の見本園の樣な立場から見ることは決してよいとは云へない。

北京神社の風致としての植樹に櫻がその材料として選ばれることは、在住邦人の祖國日本、櫻の國へのあこがれとして當然のことと思ふ。併し前述、或は色々の人々によつて述べられた如く、技術的には仲々困難である樣に考へられるのは誠に殘念である。併し、私は更に希望と工夫とを重ねてゆきたいと考へてゐる。

が、更に一步進んで大陸建設の重大な問題を與へられた我々としては、廣く植樹の材料を大陸の樹種にとつて特有の環境に於て充分生かして行くことこそ必要な技術であると思ふ。北國には北國の針葉樹、落葉樹林の鎭守の森があり、南の國には常綠濶葉樹の森があり、海岸には黑松赤松の森が、山地には杉松の社の森が見られる如く、環境固有の樹種による鎭守の森を作り出すことは北支に於ても云ひ得ることであり、それが又生活の中心であると云へるであらう。

以上、私が單に櫻と云つてゐるのは朝鮮濟州島原產と考へられる染井吉野を指して云ふのであつて、謂ゆる山櫻に就ては別である。山櫻の植樹は論議の餘地なく不適當と考へてゐる。茶、紅、綠等の山櫻の芽立ちと綠陰としての美しさは、淸楚な花と共に實に大和心の表徵である。併し、日本の風土を背景としてその美しさを知り得るものであつて、北支の環境に於ては無價値な存在であると思ふ。

神社林としての北支の樹種は極めて豐富である。雄大な樹冠を形成する各種の楡樹、楊樹、槐、亭々と空に向ふ香椿、楷、樗、欒樹等の落葉喬木、或は白松、柏、杜松、檜（ビヤクシン）等の針葉常綠樹、更に山桃、丁香、海棠、木瓜、杏、合歡、文冠果等々の美麗な花木。殊に龍爪槐、龍爪楡樹の如き、北京の特色ある庭園木は我々日本內地の園藝家が垂涎するところの樹種である。

北支には北支の鎭守の森が在住邦人の生活の中心にあるべきではなからうか。私は北京の夏の綠と多木立の大空とに限りないなつかしみを感じ、思はず拙い筆を走らせてしまつた。

（筆者・鳥取高等農林學校敎授）

『**北支**』は、**豫約購讀制**になりましたので、**御近所の書店に御豫約**下さるか、直接、**第一書房**へ、一ヶ年分誌代**三圓六十錢**（稅共）を御送金なさらぬと今後は絕對に御入手出來ません。

第一書房

鉅鹿踏査記

武智早苗

鉅鹿陶の記録

最近刊行せられた久志卓眞氏の「支那の陶磁」には、

現在我が日本に鉅鹿出土の磁州窯系瓷器が、如何に澤山將來せられてゐるか、それは數へ盡せぬ夥だしいもので、高麗青瓷の數にも劣らぬものがあるやうな氣さへする。

名品もその數に應じて將來せられ愛陶家の祕庫を豐富にしてゐる。今名品として知られてゐるものも少くないが、知られざる名品も相當あると思はれる。

と云ひ、また東洋陶磁研究所の小山氏が編輯する「陶磁」第十三卷第一號には、

遺物は大概十尺から、深いところだと三十尺位から出るらしく、今日の鉅鹿の街の南半と南城外半里の間は殆んど殘るくまなく掘り盡されてしまつたさうだ。

といつてゐる。なほ、上田恭輔氏の「支那陶磁の諸考察」には骨董瑣記の一文を引用して、

鉅鹿は大觀二年に埋沒す。爾來、地方に居住する者、偶〻古物を收得するものあり。今年七月、歷史博物館は人を派遣して、この地を發掘せしむ。地を掘ること約二丈許り、偶偶王某の邸宅に掘り當つ。發掘するところの瓷盞の類悉く「王」字を書す。以て王氏の居住せし舊屋なるを識別することを得たり。次で董氏の舊邸に掘り當つ。此處にもあらゆる器物に「董」字の署するあり。室内には、匙、箸、盆、盌を始め釵環、木櫛の類に至るまで悉く備はるを見る。また宋錢一文を室中に得たり。土炕の制は今日と毫も異ならず、炕席已に朽ちて炕上に粘着すと雖も、その形迹宛然として尙辨識せらる。炕前に瓦盆と木製の几卓あり、いづれも甚だ粗劣、而して前述の瓷器はこの卓上に配列されあつたるものなり。別に天津博物館は鉅鹿の宋瓷の鼎、洗盤、椀等數十器を得たり。悉く文字あり。或は朱書、或は漆書す。皆楷書なり。姓氏を記するものあり、年月を冠するものあり、或はその器物の價格を記入するものあり。而して最も古きものと雖も元祐（皇紀一七四六—一七五三）に溯るを得ず。

と譯され、今後鉅鹿において宋代の窯趾が發見せられるまでは、鉅鹿發掘の宋瓷には、色々の窯先の作品が混合してゐると見るのが至當であらうと述べられてゐる。

また、平凡社の百科辭典には、

鉅鹿窯は支那宋代の名陶、鉅鹿は直隸省順德府なる一邑に當り、宋の徽宗の大觀二年に黄河の洪水に埋もれたのを、最近發掘された。その直接の窯趾は發見されないが、その出土作品は宋窯の標本として珍重される云々

とある。

×

私が初めて鉅鹿を訪れたのは昭和十八年二月であつたが、街は新らしい文化の攝取にうとく、古い西域的都市の風格をとゞめてゐて、なぜか懷かしいものが感ぜられた。中山南大街から東嶽廟の方へ折れて、敎會のチヤペルの下を通り、忠靈塔の境内へ出ると、もはやぼつ〳〵と破片が地面に光つてゐる。

×

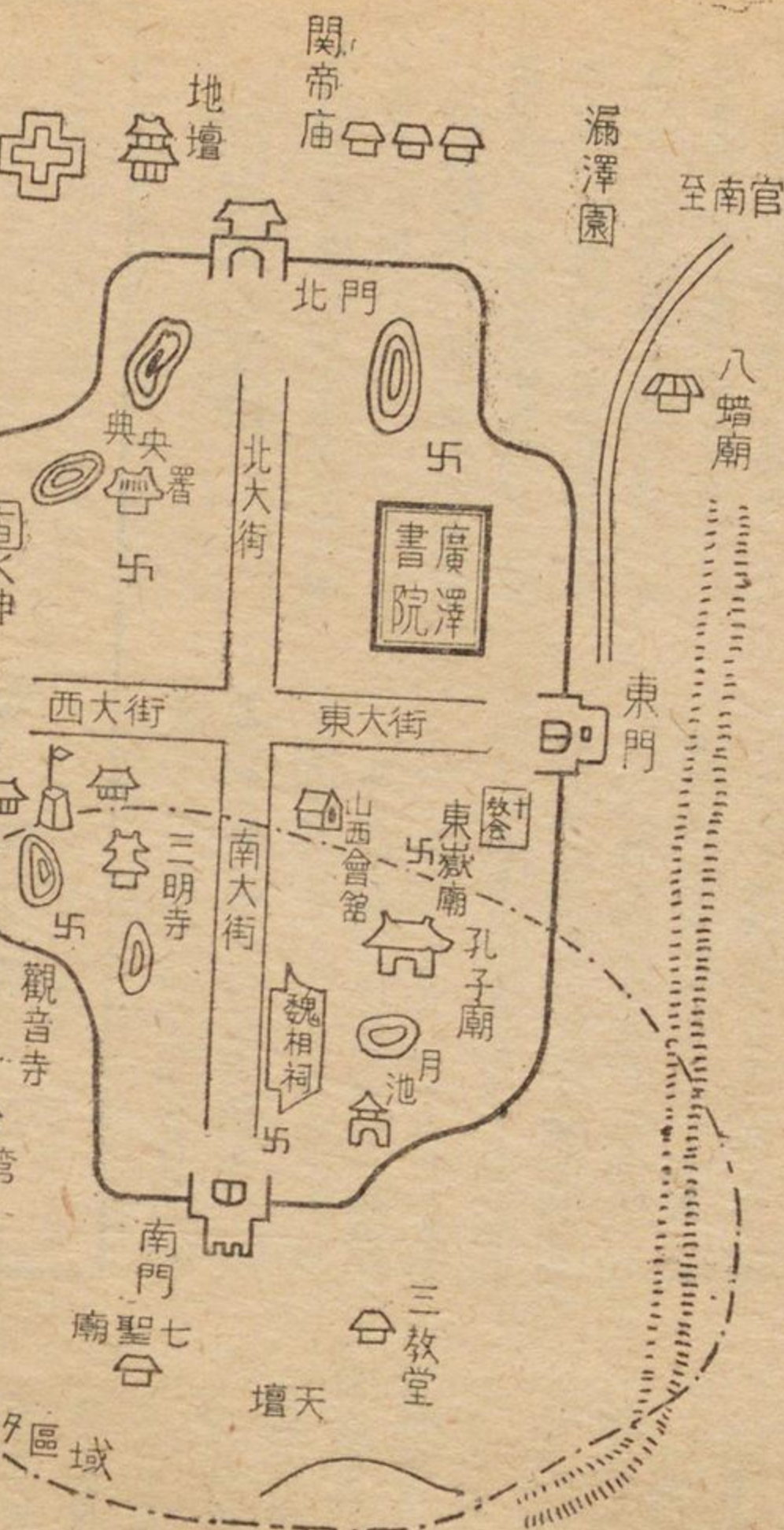
荒廢した孔子廟の境内は、掘り返した瓦礫が散亂し、陶片はあまり得られなかつたが、それでも定窯に似た白磁や、明代に推定される綠釉のかゝつた鐵繪（黑花）のものなどがあつた。

廟堂の西側や、前面の華表のかたはらには未だ掘痕の新らしい四米くらゐの竪穴があつて、足がかりをつたつて底へ下りると濕つた土の匂ひがする。

四圍の地層は一帶に瓦礫や破片を含んでゐるが、亂れてゐて何物をも示さない。たゞ地平から一米半ばかりのところに一部木炭の層や獸骨の層などがあつて、唯一度の洪水によつて出來た地層ではないことが推定された。

尙、こゝでは定窯に比定されさうな化粧掛のない細潤なる胎土の白磁片が磁州白磁よりも多いことが注目され、私はこれが謂ゆる內邱窯ではないかとも思ひ、また磁州窯附近にも此の手の窯があつたのかとも、また汝窯附近の白磁窯の製品かともさまざま惟ひ迷つたが、結局地理的な理由から、これは內邱窯の製品であら

うと想定した。ある人はこれを粉定に分類するらしいが、明らかに粉定ではない。粉定は支那語大辭典にもある如く、南定の別名であつて定窯に倣うて青田の石粉を和して江南景德鎭で燒造した質鬆脆なる瓷器であつて鉅鹿のごとき奥に磁州、邯鄲、内邱などの窯業地を控へた街に此樣に澤山進出してくるわけもないのである。けだし北方の古玩店では南方で定窯風の白磁南定を粉定と呼ぶのに習うて、眞正の定窯白磁をも粉定と呼び誤つてゐる。

尙、北方瓷と雖も窯業には地理的條件と、相當な資本も職人的熟練も必要なので、古來窯家、陶人はやゝもすれば經濟的な理由や災害などに逢つて經營困難に陷り易く、たちまち離鄕分散するものが多い。絕滅、復興、派生は絕えず窯業史に於ては繰返されてゐることである。例へば今盛んに燒いてゐる彭城鎭窯なども宋磁州窯の流れを汲んでゐることは事實であり、彼自身もまた咸豐年間の地震に逢ふと數年斷絕し、最近紹介せられた井陘の南横に窯など多くの小窯を分派してゐる。また、一昨年小山富士夫氏によつて發見せられた燕山村、磁間村窯附近を中心とする定窯系の技術にしても、そこを中心として遠く江南から朝鮮までも廣がつてゐるのだから、磁州窯は磁州を中心に汝窯・均窯は禹州を中心にして各ゝ繁殖し、その販路を獲得せんとして來たのであらう。そしてその結果、北支那の窯業技術は混淆して種々雜多となり、たゞ北方瓷としての工程を簡略するところから來るところの原始的な共通の傾向を持つのみで、その外には特に豁然たる窯技上の傳統的けぢめや譜系は覓めがたいのであれば、もはや此の上は北方瓷の疑問は窯趾の調査を期せずしては解き得ないであらう。

孔子廟の南門のあたりまで陶片のびつしりつまつた畠が續いてゐる。これは、どうしたわけだらう。大抵の城都は特定の

鉅鹿縣圖

關帝廟 地壇 漏澤園 至南官 八蜡廟 北門 中央署 北大街 廣澤書院 火神廟 西門 至順德 西大街 東大街 東門 山西會館 東嶽廟 三明寺 南大街 孔子廟 觀音寺 魏相祠 月池 灣子村 南門 七聖廟 三教堂 天壇 發掘ノ行ハレタ區域

理由のない限り、南へ南へと發展し、北門附近が空地になるのが常態であるのに、併しよくみると此の町の城壁は黃土で築かれてゐて、外側には城壁よりも高い大波のやうな砂の隴が押し寄せてゐる。これでは少し大きい洪水が來れば、ひとたまりもなく城壁は崩れて、南門附近の民家はひといきに押し流されるに違ひない。そして、科學を知らない住民達はその慘劇が過ぎて幾年かすると、またぼつ〳〵とそこに家を建てる。そして又流される。

さうしたことが限りなく繰返されてゐるのではなからうか。鉅鹿縣志には大觀二年、黃河決闉境陷沒とあるのを始め、次のやうな洪水の記錄がある。

明　成化十八年、大水

嘉靖二十三年夏六月、大雨、水嚙圍、埰口俱頽

嘉靖四十三年、暴水驟至、五門俱塞、浮舟於城

隆慶三年、大水自任縣至邑境舟揖相通城下

萬曆三十五年、大水廬舍漂沒

淸　順治十一年、大水

順治十二年、大水

康熙元年五月八日、大水

康熙二年、十年、十四年、大水壊民房室

康熙十七年七月、漳水至城堤

嘉慶六年秋七月、大水

道光二、三年秋七月、大水

道光十年四月、大風雨連三日夜、壊民廬舍無數

光緒十一年六月、大水禾多漂沒

以上の記錄をみても、鉅鹿出土の陶磁器は、宋大觀年代のもののみではなく、却て明以降のものの方が多いのであらうと云ふことは充分推量される。

併し、さうなつてくると「骨董瑣記」以來の世界各國の支那陶磁關係文獻は訂正を必要とし、謂ゆる鉅鹿陶の價格は暴落し、古陶磁蒐集家たちは不滿であらうが、學究的立場からすれば、その眞實を掩ふことは出來ない。勿論此の記錄以前にも洪水は無數に繰返されたであらうし、深い地下より發掘されるものの中には、比較的古いものがあることは事實であるが、地平は必ずしも水平ではなく、これを何米と規定することは困難である。

扨て、この南門附近では私の鉅鹿で採取せる破片の大部分を拾つたが、その中には繡花、印花、劃花、雕花の白磁を始め、黑花、芝麻花、黑釉、黑ソバ、天目釉、飴釉、唐三彩系釉、青瓷均窯、影青風のものの明淸の青花など多數あり、優秀なものとしては、下に鐵繪の二線を描いた粗陶のものがあつた。豫期してゐて得られなかつたものは、眞正の定窯器と、汝窯官窯の靑瓷或は白磁と、南方影靑、鶉手などであつたが、地表に落ちてゐるものはその一部分であるとみなければならないから、これらのものが鉅鹿出土陶の中には含まれてゐないとは云へない。たゞ比較的少ないと云ひ得るのみである。殊に鶉手などは明らかに磁州窯系のものであると思はれるし、必らずあるべき筈である。併し定窯、汝窯、影靑、吉州窯器などが若し一個も出土しなかつたとすれば問題は大きくなる。

南方影靑、吉州窯器などはその頃盛んであつた北方瓷に押されて進出し得なかつたとしても、定窯、汝窯は宋代の官窯であり、國家の財源を補ふべき機構を以て多量生產されたと考へられるから、宋代の鉅鹿へ來てゐない筈はないと思はれるのである。

併し、多くの出土陶器のうちには、明白に宋瓷が含まれてゐる。すると、宋代の官窯は宮室の什器を專管する純粹な宮廷窯で、明、淸時代の重要產業の管掌としての官窯とは性質を異にしてゐたもので、定窯、汝窯と雖も一地方窯にすぎなかつたと解すべきか、或はまた宋代の陶磁器は未だ一般的な日用器具として普及して居らず、陶磁工業史の幼年期に位し、窯業は小規模な家內工業、副業的なものであつたのであらうかなどと色々臆測せられる。

事實、宋瓷には、盌なども蛇目のものは少なく、古いほど造りが入念で、新らしくなるに從つて、鎚目紋や櫛目紋が增え、印花や繡花のものが多く、あの流線的な速度のある紋樣に化し、果てはくづれて亂暴となり、西域傳來の黑花などの出現となつてゐる。

併し、此樣なことの確實な考察は、尙、今後の學術的な發掘を待つて、人類史的に鋭く追究されなければならない。「南城外は殘る隈なく掘り盡された」と云つても、それは盲目滅法に竪穴を掘つて、目星しい器物を掘り出したまでのことであつて、決して完全な發掘が行なはれてゐるのではないのだから、今後專門家の手によつて發掘が行なはれれば、鉅鹿に限らず、すべて黃河舊道附近にある古代の埋沒都市は科學のために偉大な資料を提供するに違ひない。

「宋錢一文あり」などと云ふ骨董瑣記の記錄は曖昧であるが、今、合作社に保管されてゐる唐三彩釉の浮屠など時代は未詳であるが、唐虞器の瓦棺の研究に貴重な資料でもあり、その出土

狀態などの記錄が欲しいと思ふ。

　これは餘談になるが、今、假りに大東亞省の文化施設の一翼として、華北を統合する活潑な文化施設の一翼として、華北を統合する活潑な文化機關があつて、各地の學術的調査、史跡保存などが積極的、綜合的に行はれたとしたらどうであらう。たしかに悔恨もなくて、速やかに北支那の諸般の事情は明朗となり、陰惡なき興亞の大業を如實に見ることが出來るに違ひない。

　その國の學術文化の低調さは、恐るべき破壞行爲を無意識にやつてゐるものである。考古學の一分野に於ても、今此の鉅鹿の史蹟が無慘に破壞されてゐるのをはじめとして、各地の古墳古蹟は盜掘に任されてゐる狀態である。

×

　次に西門の方へ戻つて來て、今は青訓所の看板が掛つて廢屋のやうになつてゐる三明寺趾を訪ねたが、此處には地表に落ちてゐるものは尠なく、掘返した盛土の中から、宋から明末までのものと思はれる磁州窯系のものを若干得たが、その中には一時、骨董屋で噂の高かつた高臺內に墨筆で銘記した乳白色の白磁などがあつて時代は明末かと思はれた。高臺內に銘記する風習は北方でも明代に流行したやうである。

　それから、かゝる地方では黃土でねりあげた城壁は、古ければ必ず古陶のかけらを含んでゐるものであるが、東側の土臺に多少あつたきりで、西側には殆んど見られない。これは現在の街の東南部に舊市街が發展してゐて、度度洪水に見舞はれたと想定される唯一の資料でもある。

　勿論、ポンペイ程の遺跡を想像してゐたのではなかつたが、私の鉅鹿への期待は當つてゐたやうであるし、また當つてゐなかつたやうでもある。併し鉅鹿は今は地勢的に砂に埋もれてゐるけれども、南北朝頃から唐宋にかけては、やはり燦然たる佛教文化の影響を享けて、五臺、曲陽、定縣、獲鹿、正定、趙縣、彰德、開封、洛陽などとの一環をなす一都市であつたことも充分想像せられたし、また有名な地下都市がどんなものであるかと云ふことも、這樣な地下都市なら黃河流域には無數にあるとみてよいと云ふことも、おぼろげに判つたのである。

×

　日を改めて更に城外を一巡すべく西門を出てみた。外は一帶に雪が降つたやうな白い砂地で、灘子村の向うの砂丘を越えると旣に陶片が寶珠のやうに散亂してゐる。

　このあたりも、民國九年頃から發掘がはじまつて、全く自由企業的に統一も計畫もなくして、只、金錢のために無學な權力のために掘り返された痕が荒寛たるものであつた。

　いつの間にか遠く城郭から距つて、三教堂のあたりへ來ると、砂に埋もれて遠々と起伏して續いてゐる一脉の土盛があるのを發見した。舊城趾か、或は外城の壘趾か、それとも防水堤か、何れにしても其處に散亂する夥しい明初、明末の染付片から推定しても、このあたりに人家が密集してゐたことは容易に想像された。

　猶、この邊で集めたものの中には、饒州とも吉州とも汝窯とも私には判定出來ない滑らかな白高麗樣の白磁や、大明成化年製銘の高臺や、やはり明初の景德鎭瓷と思はれる壘付の幅の廣い高臺などがあつた。

　それから進路を北にとり、城東に出て、やはり明或は清代の染付片や、北方白磁を拾ひながら行くと、ゆくりなく石の狛犬が砂の中から頭をつき出してゐたりするのに驚かされた。

　曠野は前も後も等しく銀盤のやうに輝いてまぶしい位である。あの向うの砂丘も越えて行つてみたく思つたが、遂にそれを果さなかつた。

第一書房　新刊
東京市麴町區三番町

東大助教授　池田龜鑑著
古典文學論
A5判三三六頁價三・九五〒・四五

三枝博音著
梅園哲學入門
B6判二六四頁價二・一〇〒・二〇

文學博士　茅野蕭々著
ゲョエテ研究　上巻
B6判五〇〇頁價二・六〇〒・二〇

秋山謙藏著
日本世界觀
B6判三〇四頁價一・九〇〒・二〇

陶山務著
中江藤樹の人生觀
B6判三六〇頁價二・一〇〒・二〇

水原秋櫻子著
三代俳句鑑賞　秋冬新年の巻
B6判三五〇頁價二・一〇〒・二〇

右はいづれも六月中旬から七月中旬にかけて順次新刊いたします。最寄の書店へ豫め御申込下さるやう御願ひいたします。

華北の動植物に對する一考察

宮本七三郎

一般に動物は植物から生れたといつて良いが、北支では土から生れたといふ感じが強い。

北支の土壤は灌水農業の盛んなところでは燐酸の足りないところもあるが大體日本の土地柄に比べると地力は相當にある。たゞ、それが水の不足から窒素と有機質が不足して、土壤も非常な惡影響を受けてゐる。

發芽には水を要するが、發芽の際にこの水がないので發芽歩合が非常に惡く、種子用として用ひられる量も馬鹿にならぬ程多い。從つて播種の際の種子の無駄は輕視出來ぬものがある。北支では先づ第一に水が足りないのであつて、その上灌水にも夫々の時期があり、なか〳〵難しいものである。日本に於けるより數倍の努力が耕作草の栽培に當つて要するのである。

日本では全面積の十六%、六百萬町歩の耕地（内地）で六千萬人を養つてゐる。之に對し北支では三千萬町歩の耕地で一億の人口を支へてゐる。獨逸は日本の三倍の耕地で日本と同じ人口を支へて居り、北支はこれと同じ割合であるといへるが、獨逸は理水が發達してゐるので農業的には北支より優れてゐる。

要するに、北支の畑地の生産量は日本の畑地の三分の一、水田は二分の一（田は一般に畑の三倍の收穫がある）とみてよい。土地の生産力をこれからいへば、日本の耕地の生産力は支那の數倍あるといつてもよく、從つて、北支は五百萬町歩の土地（日本の耕地の生産力に換算）で一億の人口を支へてゐることになり、非常に少い食物で人口を支へてゐるのである。

一般に北支では、低地にはスゲの類が多く、アルカリのあるところではアカザの類が繁茂する。山地は乾燥して居り、寒暖の差が甚しいので、葉も莖も細くなり、地上の部分は小く、根は極めて強大になつてくる。そこで太陽のエネルギーと熱とさへ惠まれるならば、何時でも直ちに伸びようとして居り、之は蒙古地帶に於て特に見受けられるのである。この野草は霜が降つてくると、そのまゝ立枯れして自然に乾草となり貯藏されるが、この自然的乾草は冬季に於ける家畜の唯一の食物であり、北支の牧畜に利することが實に大きい。

北支の牧畜は特に有名で、黄河流域の毛皮は世界の王座を占めてゐたが、事變以後は餘り振はず、卵、豚毛、羊皮の生産は目下停頓中である。要するに、畜産全體としていへば非常に減少し、農業上に惡影響を與へてゐる。

北支に於ける家畜税の存在も無視してはいけない。家畜に對する税金は省によつて異なるが、省財政の大體十八%から三十%を占めてゐるほどの重要財源である。この省税の外に、家畜には通行税、屠殺税等の不當税が課せられるのを常として居り、これらの税負擔をみると實に大きく、農業上貿易上に極めて重大な影響を及ぼしてゐる。

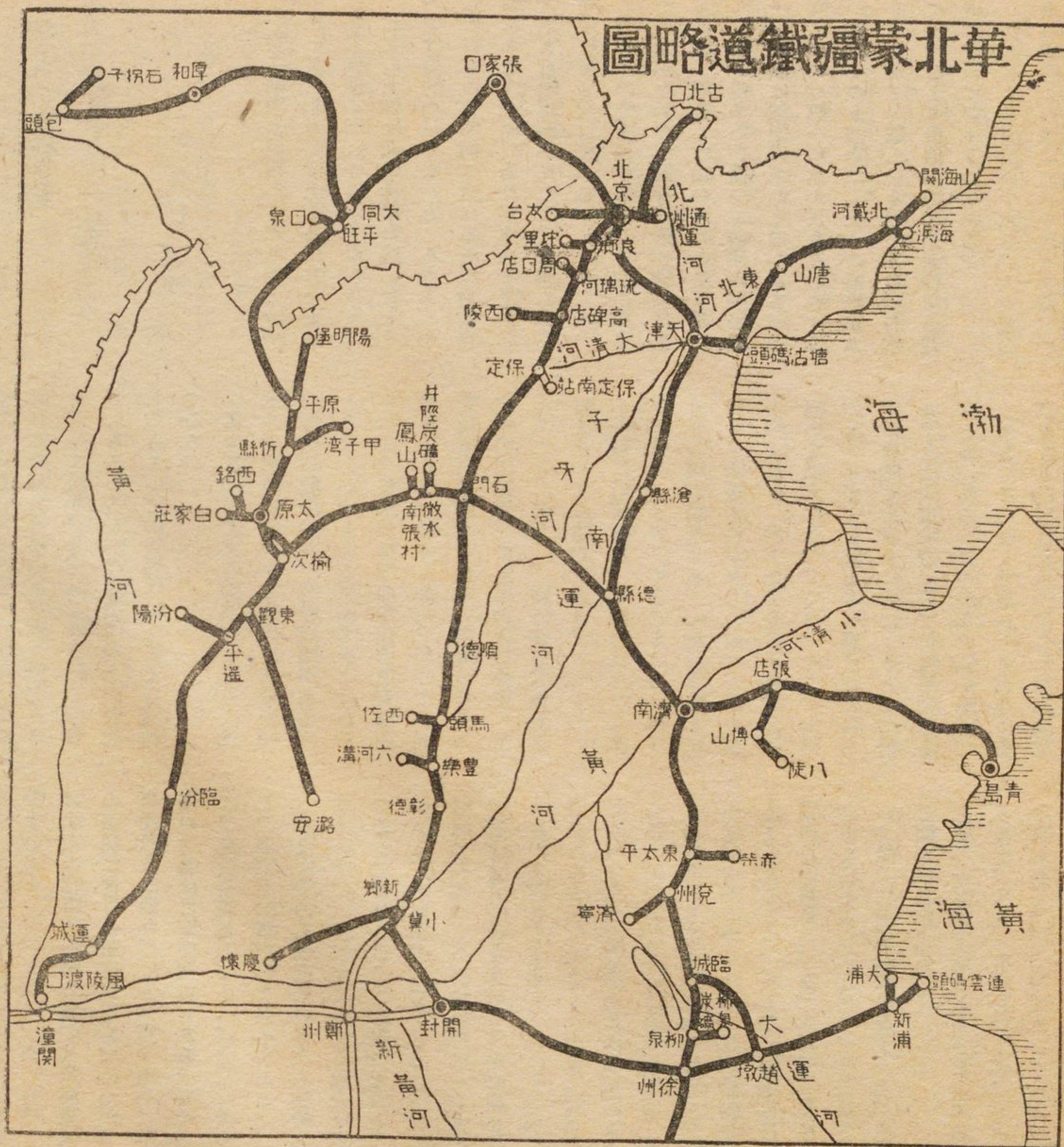
馬で代表的なものは蒙古馬だが、蒙古馬は草許り食つて一生を終り、特別の狀況の下に置かれなければ穀物を食ふことをしない。そして、冬季には榮養のない枯草だけを食ふので、單に生存してゐるといふだけで、生長はしない。從つて生長期間は長く、七、八歳で漸く生長が止る。

尙、日本馬は高さと長さとの比例をみると、大體正方形を作るが、蒙古馬は胴が長く、長方形である。

牛は蒙古、山東、山西に多い。山東山西の樣に穀物の多いところではよく牛の改良が行はれてゐるが、それでも日本などに比べては二、三年生長が遲く、生長に七、八歳を要してゐる。

豚の飼育に於て草の利用が盛んである。日本に於ける樣な改良豚は草を食はぬ。脂肪の特に厚い改良豚は支那人の欲する肉を與へるものでなく、高い穀類を食はせなければならぬので、全く支那人からボイコットされるのも當然だらう。矢張り、あの腹の土につくほど垂れ下がつた支那豚はあらゆる點に於て支那人の趣味にあつてゐるらしい。羊は質實である。

北支の家畜は、資質からみると野性的なので飼育に穀物を必要とせず、然も體質が頗る強健である。卽ち世界的標準に外れてゐるにしろ、その民度に順應した家畜をもつてゐるといへる。

飼料資源の非常に少いところで、穀物を食はせぬ飼育方針から、土地の利用は極めて周密である。草原の利用は勿論、刈跡地に家畜を次から次といれ一草も一株も殘らぬ樣に刈跡地を利用する。家畜も之によくなれ、北支の野草にしろ、粗剛すぎるものまでよく消化し、殊に駱駝は皆のくひ餘した、最も粗剛のものを食ひ、結局後に一草も止めぬのである。

華北蒙疆鐵道

京山線（北京—山海關）
京古線（東便門—古北口）
京漢線（西便門—小冀）
津浦線（天津北站—蚌埠）
京包線（豐臺—包頭）
膠濟線（青島—濟南）
石德線（石門—德縣）
石太線（石門—太原）
同蒲線（大同—蒲州）
懷慶線（新鄉—懷慶）
隴海線（連雲碼頭—開封）

（お斷り「東城記」休載）

昭和十八年五月十五日印刷納本
昭和十八年六月一日發行

四月號
（每月一回一日發行）

編輯者 北京・華北交通株式會社資業局 加藤新吉
發行者 東京市麴町區三番地一 長谷川巳之吉
印刷者 （東京）小石川區久堅町一〇八 共同印刷株式會社 古川一郎
發行所 東京市麴町區三番町一 第一書房
振替 東京六四二二三番 一四一五番
電話九段（33）一二三三四番 三三四四番

會員登錄番號 一一六五〇八番

一册定價㊝三十錢（郵送料一錢五厘）
一ヶ年分 金三圓六十錢

配給元 東京市神田區淡路町二丁目九番地 日本出版配給株式會社

禁無斷轉載・檢閱濟

製法特許の

純正化學療法劑

ポレオン「日染」は内服により血液、體組織へ殺菌性、抗菌性を賦與し病源菌を殺滅し治癒せしむるを特徴とする純正化學療法劑なり

適應症

扁桃腺炎
齒槽膿瘍
中耳炎
急・慢性 化膿性 淋疾
婦人科疾患
其他あらゆる 化膿性疾患

二〇錠・一〇〇錠

ポレオン「日染」錠

NISSEN

製造發賣元 日本染料製造株式會社 大阪市此花區春日出町
一手販賣元 稻畑産業株式會社 大阪市南區順慶町二丁目

P-251

NISSEN

砒素驅黴劑

"日染"の新發賣!

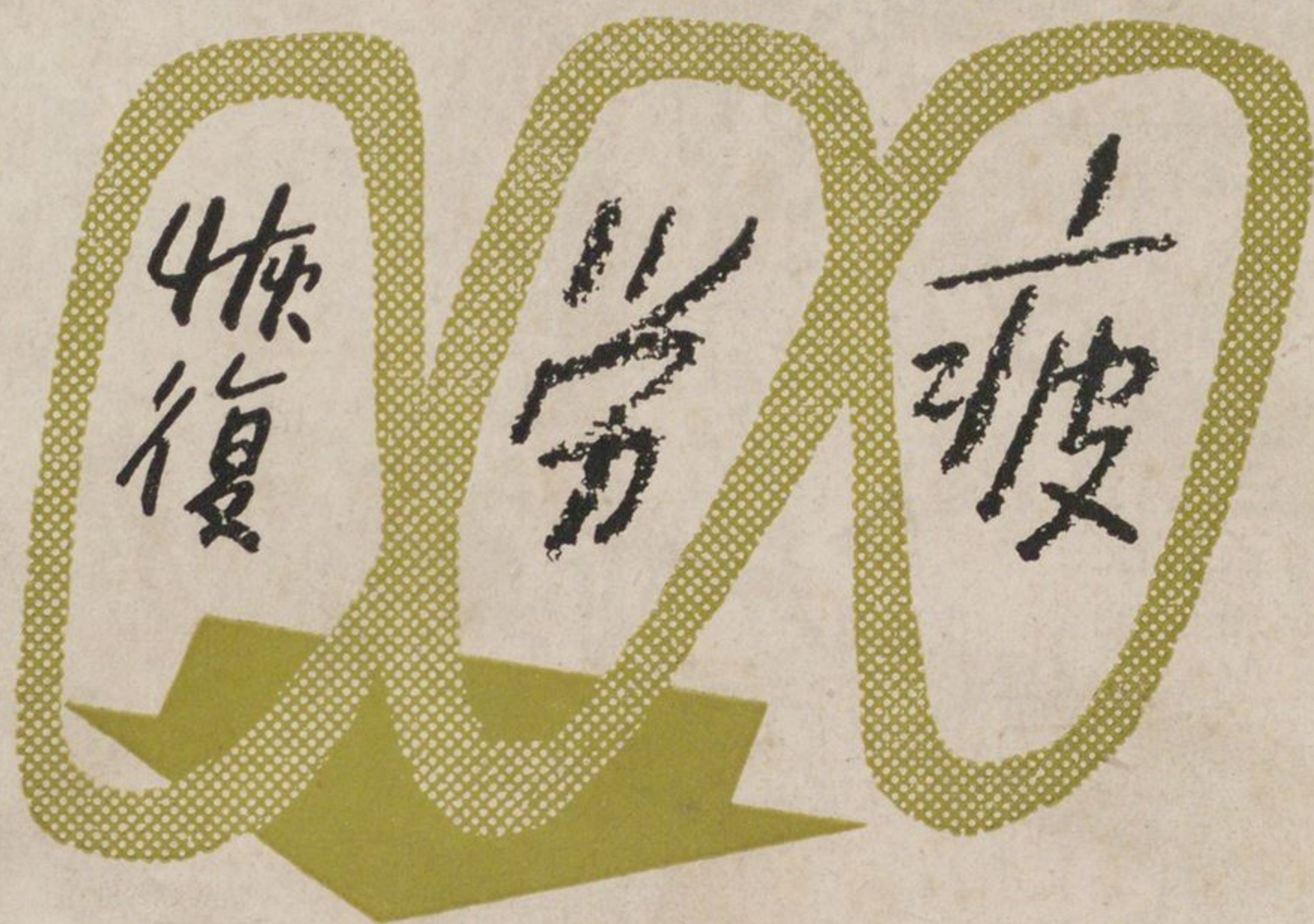
今般弊社が完成したサビノールナトリウムは日本藥局方アルゼノベンゾールナトリウムに一致し其の規格に適合し然も嚴密なる効力試驗並に臨床試驗を經て發賣す。

時局下眞面目なる醫藥の要望さるゝ折柄自信を以て御薦めし得る「日染」の驅黴劑を御認識賜はり御愛用あらん事を誌上を以て懇願申上げ新發賣の御挨拶に代へる次第であります

一號 二號 三號 四號 五號 六號
各一管入及一〇管入

サビノールナトリウム

製造發賣元 日本染料製造株式會社 大阪市此花區春日出町
一手販賣元 株式會社稻畑商店 大阪市南區順慶町二丁目

強力メタボリン錠

我々か攝取する含水炭素が充分に酸化せられずして乳酸又は焦性葡萄酸の蓄積となり……

疲勞を來し、筋肉痛、肩凝り、腰痛、神經痛等の一因となり心身を弱化せしむ即ち高單位ビタミンB_1はこの蓄積物質を分解・解毒し組織の機能を正常ならしむ

其の他……

胃腸疾患・肺結核・肋膜炎等の消耗性疾患時の榮養補給、脚氣等に

V・B_1含有量 一錠中〇・五ミリグラム

☆一〇〇錠 三〇〇錠

製造發賣元 株式會社 武田長兵衛商店 大阪道修町

昭和十四年七月四日第三種郵便物認可 昭和十八年五月十五日印刷納本 昭和十八年六月一日發行（毎月一回一日發行）第四十九號

北支 ㊅ 定價 三十錢